

江戸川乱歩の世界  
盲獣

目次

江戸川乱歩の世界

盲獣

- 一、 レビュー団の女王
- 二、 うごめく触手
- 三、 執念の花束
- 四、 鏡の裏
- 五、 悪魔の曲線
- 六、 地底の盲獣
- 七、 天地晦冥かみめい
- 八、 地底の恋
- 九、 情痴の極
- 十、 雪女郎
- 十一、 足のある風船
- 十二、 冷たい手首
- 十三、 クモ娘
- 十四、 めくら湯
- 十五、 真珠夫人
- 十六、 肉文字
- 十七、 紫檀したんの太もも
- 十八、 巨人の口
- 十九、 女どろぼう
- 二十、 怪あんま
- 二一、 砂遊び
- 二二、 寡婦クラブ
- 二三、 ゴム人形
- 二四、 女怪対盲獣
- 二五、 裸女虐殺
- 二六、 イモムシごろごろ
- 二七、 鎌倉かまくらハム大安売り
- 二八、 盲人天国
- 二九、 盲人の彫刻家
- 三十、 悪魔の遺産
- 三一、 触覚芸術論
- 三二、 結び

※  
参考文献

江戸川乱歩の世界  
盲獣

## 江戸川乱歩の「盲獣」

例えば、江戸川乱歩の『盲獣』という作品は、彼の数多くとある作品の中では、それほど有名な作品ではないかも知れないが、しかし、映画やテレビドラマなどで観たという人は、意外に数多くいるのではないかと思う。しかし、その「内容」は、どうしても原作の内容とは少し違うものであり、それゆえ、原作の「本文」では、一体、どのような内容になっているのか、それをできるだけ「本文」に寄り添いながら、順を追って考えてみたいと思う。――まず、冒頭の「文章」であるが、それは、次のようなものである。つまり、「……十年前以前、浅草歌劇全盛時代に、少女歌手として売り出した水木蘭子は、今レビュー全盛の浅草に――浅草の中でもレビュー第一の帝都座に帰り咲きをして、みずみずしい肉体と美しい声で、浅草のレビュー界の女王とうたわれていた」とある。つまり、今、浅草で最も光り輝いている踊り子こそは、まさに「水木蘭子」ということになるのである。

### 一、レビュー団の女王

さて、その水木蘭子は、いつもよりも早起きをして、午前十時ごろ、上野公園の美術館に自動車でのりつけたのである。同伴者は、内弟子の沢君子、君子は美貌では座中第一、当時十六歳であり、一方、先生の蘭子は、すでに三十歳を越した、あらゆる意味で今を盛りと輝きわたる爛熟の花であったとある。そして、その美術館では、秋の展覧会が開かれていて、そこには彼女のなまめかしい肉体をモデルに制作された問題の彫刻『レビューの踊り子』なども展示され、その大理石にきざまれた彼女自身の肉体美をつくづくながめ楽しむために、わざわざ雨の中をやって来たのである。

そして、蘭子は、途中の西洋画、日本画には目もくれず、彫刻陳列室へと急いだ。そこには男性の筋肉隆々とした裸像などをはじめ、女性の胸や恥部などを大胆にさらけ出した裸像などがいろいろと展示されていたが、雨が降っているせいもあり、見物人は、あちらにひとり、こちらにひとりという、恐ろしいような静けさであったとある。すると、君子が突然、「……先生、ちよつと、まあ、気味がわるい、あれ、ごらんさい」と言うのであった。見ると、蘭子の彫刻の台座にのぼりつくようにして、なめらかな大理石の膚を、両手をひろげてなでさすっているのであった。その人物は、むろん男性であり、もう三十四、五歳の分別盛りの年配である。黒の外套を着て、黒い鳥打ち帽をかぶり、大きな青ガラスのメガネをかけている。なるほど、盲人なのだ。それにしても、あんなでまわし方は、あまりにも執拗である。――なめらかな大理石の膚を、五本の指が「クモの足」のように不気味に這いまわっていた。目―鼻―口、男はその花びらのような唇を長く楽しんでた。それから、胸―腹―ももへと、全身をなでまわしていたのである。

一方、蘭子は、それを見ているうちに、不思議な錯覚に陥っていた。男のぶきみな手のひらが、直接わが肉体をなでまわしているかのように感じられるのだ。やがて、くすぐったい感じが、だんだんと焼きつくような痛みに変わっていった。彼女は、からだのあらゆる部分にそれを感じ、真っ青な顔になって、あぶら汗がにじみ出して来た。君子が、「……この番人に言いつけましようよ」と言うのと、蘭子も、「……ええ、そうしましょ」と応え、そして、二人して制服の男を見つけて戻って来ると、そこにはもう盲人の姿はなか

ったのである。蘭子は、一日中、このことが頭から離れず、「……ああ、いやなものを見てしまった。美術館などへ行くんじゃないかった」と、彼女は、それが何か恐ろしい出来事の前兆のように思われて、気に止まないではいられなかったのである。

\*

\*

さて、これは、実に見事な「書き出し」部分であり、というのも、水木蘭子という踊り子は、まさになまめかしい肉体美の持ち主であるがために、今、浅草でも最も人気の高い踊り子の一人となっているが、その蘭子のなまめかしい肉体をモデルに制作された大理石の彫刻を、あまりにも執拗になでまわす盲目の男というのは、当然なことながら、その水木蘭子の噂をよく知っていて、それゆえ、わざわざ美術館へと観にやってくるというよりは、むしろ自分の「手の感触」で、その一つ一つの「肉体の部分」（パーツ）を、まさに評判通りなのかを執拗に確かめていたのである。それをたまたま見た、まだ十六歳といううら若い乙女（君子）の目には、ただただいやらしい中年男の気味の悪い行為として見えているだけであったが、一方、三十過ぎの今を盛りと輝きわたる爛熟の蘭子という女性の肉体は、逆に、その執拗な行為になぜか敏感に反応してしまい、最初は、たたくすぐったいような感じに過ぎなかったが、だんだんと焼きつくような痛みに変わり、それは、蘭子からのあらゆる部分にそれを感じて、真つ青な顔になり、そして、あぶら汗がにじみ出して来たのである。これは、一体、どういうことなのか？ それは、水木蘭子自身、まだ自分でも気づいてはいなかった、自分自身の奥深くに眠る何か呼び覚まされるような感じに襲われていたのである。だからこそ、一日中、そのことが頭から離れず、ただただ、「……ああ、いやなものを見てしまった」という思いに深く襲われているのである。

## 二、うごめく触手

さて、それから三日後の夜、蘭子は、いつものように舞台を終えて、自宅の部屋へと戻ると、その疲れた身体を癒やすために、近くのあるまを呼ぶのがいつもの習慣であった。その夜も、楽屋ぶろ上がりのまだそのほとぼりの冷めやらぬ身体を寝まきに替えて、寝室のふとんの上にすわってあんまを待っていると、やがて女中に手を引かれたあんまが入って来たので、そのままそのあんまに身をゆだねていると、どうもそのもみ方がいつもとは違って下手であり、そこで、蘭子は、「……あんまさん、初めてだね、近ごろあすこの家へ来たんですか？」と聞くと、「……へえ、二、三日前に参りまして、今晚は、いつもの人は他に仕事がありましたので、私が代わりに参りました」と言うのであった。

蘭子は、「……そこを、もつと強くしてくださいな」と言うと、あんまは、「……へへへへ、ここんどころでございますか」と、妙な笑い方をして、ちよつと力を入れては、また、元の下手なもみ方になり、それは、もむというよりは、むしろなでまわすのであった。そして、「……ああして一日舞台では、さぞかしお疲れでしょう」と言うので、蘭子は、「……おまえさん、わたしの商売知っているの」と聞くと、「……そりやもう、近所でも評判ですから。めくらの悲しさで、その美しいお顔を見ることはできませんが、しかし、一方、こうして有名な踊り子さんとお話ができますし、そのうえ膚にまで触れさせてもらえるのですから、あんまって商売は、考えてみれば、ありがたいものです。舞台姿にあこがれている若い人たちが聞いたら、さぞかしうらやましがることでしょう」と言うの

であった。蘭子は、なんていやらしいと思いつながらも、しばらくそのあんまの全身をなでまわすようなみ方に身をゆだねているうちに、ふと、三日前の美術館でのあの盲人の、あの蘭子のなめらかな大理石の裸像の膚を不気味な五本の指でクモの足のようにあまりにも執拗になでまわしていた、あの時のあの男のやり方そっくりに感じられて来て、ぞつと寒気が走り、もうどうにもがまんができなくなった、蘭子は、「……あんまさん、かっただけれど、きょうはもう、それまでにしておいてください」と言つて、すぐにも金を支払つては、そのまま帰つてもらい、その晩は、それだけで済んだのであった。

さて、翌日の晩には、今度は、いつもの顔なじみの若いあんまがやつて来たので、蘭子は、「……きのうは、おまえさんが来てくれぬものだから、困つてしまつたわ」と小言を言つと、その若いあんまは、何かげんそうな顔をしながら、「……だつて、あなたの方からお断りにいらつしやたんじゃありませんか」と言うので、蘭子は、「……いいえ、お断りになんかやるものですか。……」ということになるが、その経緯は、次のようなものであったのである。つまり、「……ゆうべ、こちらへ何うつもりでうちを出ると、出会いがしらに、こちらのお使いだという男の人が、先生は今晩帰りが遅いので、来なくてもいいと言うので、ほかへ回つたのです。しかも、最近来た新しいあんまなんかいませんよ」と言うことであつた。それを聞いた蘭子は、「……道理で、あいつ、やけにからだをなでまわす」と思った。もしかしたら、あの美術館で蘭子の彫刻を愛撫していたあの薄気味のわるい男と同一人物ではあるまいか。大理石のはだざわりだけでは満足ができず、大胆にも、あんまに化けて、蘭子の触感を盗みに来たのではないかしら。「……きつとそうだわ。そうにちがいないわ」と思うのであつた。

### 三、執念の花束

それから数日後の、ある日、蘭子は、これから舞台に出ようとして、半裸体の姿になつて、鏡の前で最後の化粧をしていると、花屋の若い者が、「……蘭子さん、ごひいきさまからです」と、恐ろしく立派な花束を持ち込んできた。蘭子は、「……まあ、すてきな花束ねえ、一体、どなたから」と聞いても、それは、「……蘭子さんの方が先刻ご存知でしょう」ということで、帰つてしまふ。さて、誰かしらと思う間もなく、舞台へと出ていくと、一斉に、「……水木、蘭子ちゃんあーん」と、行儀の悪い不良少年やはんでん着のにんさんたちの野太く濁つた調子はずれの上品な声が、その場に響き渡り、一方、スポットライトを浴びて踊る一人舞台の蘭子は、思いきり足をはね上げたり、また、腰をふり動かしながら、耐えがたき流し目で、見物客をちらちらとながめてみると、どの顔もどの顔もあほに見えて来る。——まるで彼女は、光り輝く女王様で、見物客のすべては、その女王様にはかない思いを寄せている、身分いやしき家来どもか、或いは、取るにも足らぬ奴隷どものように見えて来たが、そのなかで、一人だけあほに見えない男がいた。

その男は、大きな黒めがねをかけ、一向にこちらを見ている様子がない。全視線がいつせいに蘭子を見つめているなかに、ぼつんと一人だけ、不気味な異端者であつた。蘭子は、踊り始めると間もなく、その男に気がつき、そして、これでもか、これでもかと悩ましき姿態の限りを尽くすのだが、男は不感症のように見向きももしない。しばらくすると、男は何を思つたか、ひよいと黒めがねを外して、彼女のほうへ顔を向けたのであつた。そ

して、男は、「……蘭子さん、わしだよ」と言わぬばかりの面持ちで、のび上がるように舞台を見上げていた。蘭子は、ハッと息を呑むと、蘭子の歌は途絶え、踊りの手も乱れ、足も崩れた。彼女は、すべてを悟ったのだ。——あの美術館で大理石をなでまわしていたのも、にせあんまになって彼女の肌をもて遊んだのも、そして、さつき花束を贈って来たのも、みんなこの男であったのだと。……ああ、なんとこの恐ろしい執念、へビは、獲物を前にして、じっと息を殺し、機会の来るのをただひたすら待っていたのである。

\* \*  
これは、まさに「ストーリーカー行為」そのものであり、その「定義」は、まさに「特定の人に対する異常なほどの執着心」であり、それは、何らかの「好意の感情」（或いは「怨念の感情」）などから執拗なままでにつきまとい、例えば、まちぶせをしたり、押しかけたリ、或いは、無言電話や迷惑メールなどを執拗に発信するのであり、その執着心は、（本人にも）なかなか歯止めがからず、或る特定の「女性」（或いは「男性」）を執拗に追いまわし、その果ては、殺人事件にまで発展してしまう場合もあるのである。それは、価値観の相違、恋愛感情、思い込み、誤解、身勝手、妄想、支配欲、独占欲、異常精神（性的倒錯）、その他、いろいろな要因（要素）が複雑に絡み合ったものであり、例えば、同じ江戸川乱歩の『蟲』という作品も、まさに「ストーリーカー行為」をテーマにした内容になっているかと思うが、ただ違いがあるとすれば、『蟲』の場合には、相手の女性を殺してから、その「死んだ女性」を自分の家の「蔵」へと運ぶのに対して、本編の『盲獣』の場合には、まさに「生きた女性」のままに「地下室に監禁」という内容になっている。

\* \*  
さて、蘭子は、病気をよそおい、舞台を途中で切り上げると、楽屋へと駆け込んでしまった。そして、君子に、例の花屋の若い者をすぐにも連れて来させ、そして、誰があの花束を頼んだのかと聞き出すと、それは、黒めがねをかけた人だということになり、やっぱりと蘭子は、あまりの気持ち悪さから、もらった花束を窓の外へと投げ捨ててしまったのである。そして、君子に客席をのぞかせてみると、もうあの不気味な盲人の姿はないと聞くと、病気を理由に帰宅するつもりでいた蘭子も、気を取りなおして、それから、レビューがはねるまで、何も変わったことはなかったのである。ただ、蘭子のところへ、彼女の恋人、若いパトロンの、小村昌一から電話がかかって来た事以外とはある。

それは、「……今夜、つごうはどう？」という電話であり、蘭子は、「……ええ、いいわ、どこ、いつものところ？」ということになり、自動車を迎えることになったのである。——これは、座がはねると、踊り子たちにはそれぞれパトロンがあつて、毎晩、その時分になると、楽屋口には、さまざまなお迎えがやってくるのである。むろん、自動車のお向かいもあり、やがて、自動車から運転手が走ってきて、蘭子の耳に、「……小村さんからございます」ということで、蘭子は、その自動車に乗って、走り出すのであった。ところが、その丁度その時に、もう一台の自動車から運転手が降りて来て、「……水木蘭子さんのお向かいです」と言うのであった。……とすると、先の車は、どこから来て、しかも、何も知らぬ蘭子は、一体、どこへ連れて行かれたのだろうか……。

#### 四、鏡の裏



まず、蘭子は、自分が乗った車は、若いパトロンの「小村昌一」からのものと信じきっていた。そして、その車が止まったのは、麹町のある住宅街であり、そこは大家らしい立派な門構えの屋敷であった。車が玄関に横づけになると、しとやかな女中さんが一人出迎えて、その女中さんに案内されて、蘭子は、長い廊下を歩いて行くと、その突き当たりには、壁いっぱいの大鏡がはめ込まれていた。その大鏡は、いわば「がんどり返し」の仕掛けになっていて、すうっと回転して中へと通路が続いていたのであった。

さて、案内の女中から、「……ここからはわたくしどもは中に入れませんので、どうぞ」と言われ、蘭子は、「……でも、この中、真つ暗じやありませんか」と言うと、「……ええ、でも、少しもあぶないことはありません。壁を伝わってまっすぐに行けばよいのです」と言うのであった。蘭子は、「……唱ちゃん、いたずらが過ぎるわ。この夜ふけに、こんな真つ暗なところへ入ってこいなんて」と思いながらも、一方では、なにかおもしろそうと思つて、壁に右手を当てて、暗闇の中へとおずおずと進んでいくのであった。そして、二間ばかり進んだとき、暗闇がいつそう暗くなり、振り向いてみると、いつの間にか「がんどり返し」の鏡が元通り締まっていた、駆け戻つて、鏡の裏を押してみても、機械仕掛けとみえて、手で押したぐらいいはびくともしない。ああ、とうとう閉じ込められてしまったと思ひながらも、まだ昌一の「悪いいたずら」だと思つていたのである。

蘭子は、不安に強く襲われながらも、なおも奥へと進むと、そこは行き止まりであり、どうしようとしていると、がたつと床が下へと降りていくエレベータになっていて、床は一丈（約三メートル）ほど下がって、ぴたりと止まるのであった。すると、「……蘭子さん、驚いたかい」と、どこからか男の声が聞こえて来る。「唱ちゃんなの」、「うん」、「……ひどいわ、ここ、いったいだれの家なの」と聞いていると、蘭子を残して、エレベータだけが上へとはね上がってしまう。——これは、一体、何を意味するのと問えば、それは、もう二度とは外へは出られない、いわば複雑な「地下室」へと閉じ込められてしまったということである。そして、蘭子は、「……暗くて、何がなんだかわかりやしない。ここにありかないの」と聞くと、「……うん、今つけて上げるよ」という言葉と同時に、パツと天井に電灯がつき、見ると、地下にこんな立派なへやが、二十畳も敷けそうな広い空洞であり、しかも、それは、出入口のない、まるで別世界へでも来たような不思議な構造だったのである。

## 五、悪魔の曲線

では、その奇怪な地下室の構造であるが、まず最初、パツと目につくのは、何とも形容し難い、不快極まる色彩の混乱であった。強い色彩はないが、全体が陰気な灰色の感じであり、種々雑多の異なった色彩が、全く不統一にめちゃくちゃに入り乱れ、のたうちまわっていたのである。それは、塗料を塗ったものではなく、その材料の生地の色の違いから生じた色彩の混乱であった。——つまり、この地下室の住人は、まさに「盲人」であったので、目に見える「色彩」には全くこだわらず、むしろ手に触れる「感触」（つまり「手ざわり」）にすべてをどこまでも執拗にこだわって作られていたのである。

それゆえ、壁も床もけつして平面ではなく、恐ろしくでこぼこであり、この入り乱れ波うつでこぼこの壁や床は、人をおかしくするような種類のものではあった。例えば、蘭子が

何気なく壁にさわると、それは、おわんをふせたような突起物がうじゃうじゃと群がっていて、蘭子は、思わずギョツとして手を引つ込めるが、それは、「……まあ、これ人間の乳房とそっくりの手ざわりだわ、気味が悪い」ということになるのである。そして、それは、女性のあらゆる「肉体の部分」(パーツ)をそのままそっくりに形づくったものであり、例えば、「……目なら目、鼻なら鼻、口なら口、耳なら耳、胸なら胸、脚から脚、手なら手、その他」、それら実に大小様々な形をしたものが、壁一面にそれぞれ目なら目、口なら口、その他が「かたまりになつてうじゃうじゃ群がっていたのである。しかも、蘭子が踏みしめている床も、何と実物の十倍ほどの大きさの「女性の裸体」が、まるで妖しく波打つようにほんものそっくりに作られていたのである。そして、その材料は、あるものは(温かい)ゴム、あるものは象牙のような物質、あるものは黒檀、紫檀、あるものはビロード、あるものは冷たい金属、あるものは柔らかいキリの木と、種々雑多で、それがうごめき、おどり、乱れて、実に様々な色と形と音との不気味な不協和音を奏でていたのである。つまり、その地下室全部が女性の実にありとあらゆる「肉体の部分」(パーツ)でできていて、しかも、それらすべてが生身の女性の手ざわりとそっくりに作られていたとともに、そこには女性の肉体が放つ「甘い香り」のジャスミンや麝香のかおりのようなお香の匂いまで立ち籠めていたのである。やがて、蘭子は、この地下室の住人が誰であるかはつきりと知るのであった。

## 六、地底の盲獣

それは、「……誰です。あなた、いったい誰です」と叫ぶと、「……おわかりになりませんか、あなたのよくご存じの者ですよ」と言うのを聞いて、蘭子は、初めて相手の男があのいやらしい中年男の盲人であることにはつきりと気づくのであった。そして、その盲人は、「……では、今そこへ行って、あなたの美しいからだに、さわらせてもらうことにしましょうかね」と言いながら、大きな唇の、その喉の奥の暗闇から、異様な虫のように、一人の人物がはい出して来るのであった。蘭子は、「……ちくしように、ちくしように、おまえはわたしをどうしようというのだ。さあ、返しておくれ、でないよと、女だつて、水木蘭子だ。何をするかしれないよ」と叫びながら、逃げまどうのであった。

一方、そのいやらしい中年男の盲人は、アハハハと笑いながら、あわてることはない、やがて、自分の「身の上話」を始めるのであった。それは、次のようなものである。

実を言うと、おれは、ある明治の大富豪の一人息子なのだ。おやじが死んで、恐ろしいほど財産を手に入れた。そこで、一つの「念願」を起こしたのだ。まず、盲目の悲しさは、きれいな女性を直接見ることができない。また、美しい景色も直接見ることができない。その他、すべて同じことである。おれは、その境遇を憎み、そして、神様を恨んだ。だが、どうなるものでもない。盲人の世界に残されているのは、音と、匂いと、味と、触覚ばかりだ。音(音楽)は、おれには吹き過ぎる風のように物足りない。また、匂いは、人間の鼻(嗅覚)は、犬のように鋭敏ではない。そして、食べ物は、ただ腹がふくれるばかりだ。そう考えると、触覚こそ、おれたち盲人に残された唯一無二の享樂であることがわかった。おれは、このたった一つの享樂にとりすがったのである。いろいろな物の中でも、生き物の手ざわりがおれには一番楽しかった。最初は、犬や猫をはじめ、いろいろな動物たちの

手ざわりを楽しんでいたが、どんな生き物も、人間の、それも女性に及ぶものはないことが、はつきりとわかつて来たのである。

おれには女房がいた。顔はきれいだつたが、肉体はやせつぽちだつた。女とはこんなものかと数年一緒に暮らしたが、あるとき、別の女のからだを知つた。それが闇つきになつて、おれはたくさんの女の手ざわりを楽しむようになった。女のからだの美しさには、いつまでたつても、際限がなかつた。おれは世界じゅうの女のはだに、ひとりひとり触れてみないではがまんができないほどになつた。そのうち、財産も少なくなり、最後に思いついたのがこの部屋であり、五年と残りの財産のほとんどを費やし、あまり有名ではない彫刻家に、過去の女のからだの中で、すぐれた部分を選び出して、彫刻家に詳しく話しては、その通りに作らせたのである。その苦心はどれほどであつたらう。そして、半年間は、ここに入りびたつて、昼も夜も、一つ一つの彫刻をなでまわして、有頂天になつていた。しかし、相手は死物だ。やがて、生きた人間（女性）が恋しくなつて来たのである。

その頃、まさに「お前の噂」を聞いたのである。そして、あの美術館会場でお前の大理石の裸像に触れ、また、あんなに化けて、お前の身体に直接触れて、評判は間違ひではなく、今まで会つたどの女性よりも、おまえは美しかった。おれは一刻も早くお前を手に入れたくなり、お前が舞台で倒れたとき、舞台裏にこっそり忍び込み、そして、小村という男からの電話を盗み聞いて、あの自動車の計画を思いついたのである。そして、まんまと、こうしてお前を手に入れることができたということである。

\*

さて、蘭子は、彼のあまりの「執着振り」に何だか変な気持ちになつて来た。心では盲人の境涯に同情しながらも、そのいやらしい顔に目を転じると、あの恐ろしくもいまわしい行動が予期されて、ゾツと総毛立つのであつた。そして、囚われの身の蘭子には、次の「三つの道」しか残されてはいなかつた。一つは、あくまでも相手を拒み続けるという道である。これは、相手次第で明暗は大きく分かれる。一つは、表面的には（ある程度までは）相手を受け入れながらも、相手の反応を見ながら、その時々に対応していくという道である。そして、もう一つは、最終的には、相手を受け入れざるを得ないという道である。この三つの内のどれを選ぶかは、相手の性格に大きく左右されるのである。何よりも大事なことは、相手の「性格」をしっかりと見極めることである。相手がどれほどの凶暴性を秘めている人間なのか？ 何が真の目的なのか？ どこまで妥協できる性格なのか？ つまり、折れやすいのか、それとも強靱な性格なのか？ その他、それらをしっかりと見極めなければならぬ。真に凶暴な性格であれば、一番は、危険な選択になる。二番は、相手の様子見であり、そして、最後は、最悪の事態を避けるためという選択と、もう一つは、相手に好意を持ち始めて、自分に心変わりが生じて来るという可能性もある。

## 七、天地晦冥

さて、蘭子に迫つて、盲人の触覚のような指先は、蘭子の腕にまといつき、虫がはうように、腕から肩へ、肩から後頭部へとぼつていった。そして、ナメクジみたいなぬるぬるしたくちびるが、彼女のくちびるを求めてうごめき始めたとき、蘭子は、激しく相手の手を払いのけ、悲鳴を上げて立ち上がった。盲人は、「……おまえさんには、このわしの

せつない心がわからんのか。頼みだ。どうぞ、このとおりだ」と、両手を合わせて拝みながら、「……わしをおまえさんの奴隷にしてくれ、踏みにじつてくれ。けとばされても、決しておこりはしないのだ。蘭子さん、頼みだ。頼みだ」と言うと、「……いけないったら、ちくしょう。おまえなんか、踏みつけるのも汚らわしい」と、蘭子は毒々しく言い放し、「どうしてもか」、「ああ、どうしても」と、とうとう二人は、激しくいがみ合うのであった。男は、ここで開き直り、「……お前がどうしても受け入れられないなら、おれもお前を二度と娑婆には返さない」と言い放ち、その激しくでこぼこでぬるぬるした床の上を必死でハアハア言いながら哀れにも逃げ惑う蘭子を、男は、どこまでも執拗に追いまわし続けるのであった。そして、終に蘭子は、もう息が切れて、目もまわって、今にもぶつ倒れそうになり、「……ああ、もうだめだ。わたしはどうとう、けだものいけにえにならなければならぬのか」と、観念の目を閉じるのであった。

その時、突然、部屋中がぐらぐらと動き始めた。それは、半ば意識を失いかけた蘭子の、物狂わしき幻覚であったのか。それとも、この地下室には何かの動力で動く仕掛けができていたのか。いずれにせよ、蘭子の目には、へや全体がムグムグとうごめき出したように見えたのである。それは、腕の林、手首足首の草むら、太ももの森林が、いつせいに、ゆらゆらとゆらめき始めた。また、巨大な鼻は小鼻をピクピクさせておいをかぎ、巨大な口は歯をむき出してうめき声を発し、蘭子の倒れ伏している黒檀の巨人は、太ももをふるわせて、異様な波動運動を始めた。それは、地下室全体が、怒濤にもまれる船のように、ゆれひしめいた。必死に逃げるものも、それを必死で追うものも、もはや目も見えず、耳も聞こえず、もつれ合ったまま、右に、左に、天地晦冥の大動乱のただ中にゴロゴロ、ゴロゴロところがりまわり、壁に群がる無数の乳房は、顔赤らめて、風船玉のようにふくれ上がり、千の乳首から、暖かい乳汁を、ころげまわる二人の上に滝つ瀬と降り注ぐなか、蘭子は、その乳汁の津波にもまれるように、いつしか気を失ってしまうのであった。

## 八、地底の愛

さて、「……さすが強情がまんの水木蘭子も、身も魂もしびれるようなこの大刺激には、へトへトになって、ついに凶暴なる猛獣の威力に屈服してしまう。屈服したばかりではなく、彼女はおぞましくも、このたぐいもあらぬ地底の別世界に、限りなき愛着を覚え始めて、いまわしい盲獣さえも、今は何かしら不思議な魅力をもって彼女の感覚をくすぐるようになり、蘭子はいかに怪盲人の妻たることを承諾した。そして、日とたち月と過ぐるうちに、地底の愛人の情交はますますこまかになっていった」とある。それは、一体、なぜなのか？ それは、あれほどまで頭の「知性や理性」などでは嫌っていたものでも、その身体への強い「刺激や快感」などを無理やりでも一度受け入れて心を許してしまうと、その「身も心もしびれるような強烈な刺激」が忘れ難くなり、それゆえ、その「身も心もしびれるような強烈な刺激」を渴望して、次第に自ら積極的にその世界を受け入れるようになってしまうのである。それが、まさに「マゾサド世界」（つまり「被虐・加虐」世界）の非日常的な強烈な「刺激世界」や「感覚世界」が成り立つ理由の一つになるのである。そして、蘭子は、かれと離れてはもはや一日も生きていけないほどに、うち込んでしまったのだ。そして、「……おまえさん、あたしを見捨てないでくださいね。ほんとうに、

いつまでも、いつまでも見捨てないでね」と、蘭子らんこともあろうものが、そんなことをいうほどにかわっていた。そして、蘭子らんこは視覚を失っていった。目の病をわずらったのではない。健全な目を持ちながら、彼女はほとんどそれを使用しなかった。それほど、盲人の触覚の世界が、彼女には気に入ったのである。視覚を忘れてこそ、はじめて、ほんとうの触覚の「味」がわかるのだ。神秘で、幽玄で、微妙きわまる手ざわり、はださわりの快こころよさが、しみじみと味わたるのだった。「……あたしは今までどうしてこんな楽しい世界を知らないで過ごしてきたのだろう。ああ、目のある人たちに教えてやりたい。あたしのようには目がありながら触覚ばかりの世界に住んでみた者には、それがはつきりわかるのだ。かわいそうな目あきさんたち、おまえさんがたは、この何ともいえぬ不思議な、甘い、快こころよい、盲目世界の陶醉を味わったことがないのだ」と。

そして、「……ああ、わたしは今こそ、触覚ばかりで生きていく目のない下等動物どもの、異様な、甘い、なつかしい感覚がわかるような気がする。かれらはけっして不幸ではないのだ。不幸どころか、かれらこそ、この世をお作りなすった神様の第一番の寵児ちゆうじなのだ」と。——例えば、目のある人間には、指先で小さな点字を読むことはとうていできないのだ。しかし、盲人は、あの微妙な小突起物を、すらすらと目で読むように読み下すではないか。昆虫の触鬚しゆくしゆの驚くべき敏感について知らぬ人はなからう。盲人の指や皮膚は、あの触鬚しゆくしゆと同様の不思議な感覚を持っているのだ。かれらの触覚は、通常人にはまるで想像もつかない、全然別種類のものなのだ、と考えることはできないだろうか、少なくとも水木蘭子みづきらんこは、それを信じて疑わなかった」とある。

\* \*  
これは、もちろん、江戸川乱歩の「見解」であるが、例えば、われわれ人間の場合、四つ足から「直立二足歩行」へと進化することによって、一体、何がどう変わったのだろうか？——まず、立つことによって、「目」(視覚)と「耳」(聴覚)との「発達」を促すことになった。が、一方では、「嗅覚」や「触覚」などは、むしろ「後退」してしまったのである。そして、われわれ人間の場合、七割から八割近くは、まさに「目」(視覚)に依存しているのであり、それゆえ、どうしても「見た目のよいもの」を何よりも優先的に選ぶことにもなるのである。——一方、「目」が不自由になれば、今度は、何よりも「耳」(聴覚)が発達して来ると同時に、まさに「嗅覚」や「触覚」なども敏感になって来るものである。特に手ざわりの「感触」というものは、まさに「物」を直接確認する上では、最も大事な「感覚」になるものであり、それゆえ、手ざわりやはださわりなどは、目の見える人たちに比べれば、遙かに「敏感になっている」ことは、全く疑いようのないものである。——かようにして、やみとはだざわりのみの数ヶ月が過ぎ去った。彼女が地底の生活を始めたのは秋の終わりであったが、いつしか年が過ぎて、極寒の季節がやって来た。

## 九、情痴の極

その頃になると、触覚世界の男女は、遂に情痴の極みに達していた。そのような「異常な生活」を続ける感覚のみの人間に、当然、来たるべき運命がやって来た。かれらは微妙なる触覚の限りを尽くして、お互いの全身の微妙なる特徴を知り尽くした結果、いまやその微妙なるものに飽き果ててしまったのである。そして、相手を取り替えるか、何かどぎ

つい刺激を求めるほかに、方法はなくなってしまったのである。盲目の夫のほうは、もう蘭子にあきあきしていたけれど、蘭子のほうはまだ未練があつて、相手を取り替える相談は、いつも蘭子の涙によつて、お流れになつていた。そこで、かれらはもう一つの方法を選んだ。今までの微妙な触覚遊技を廃して、思いきりどぎつい刺激を求め合つたのである。そして、ついにかれらは、やみの中の二匹の猛獣のように、お互いにお互いの肉体をかみ合い、殴り合い、そして、傷つけ合うことを楽しむまでになつた。それはそれで、また言いがたき魅力があつたのである。やみの中の盲獣夫婦は、かくして、最後の血のはださわりという無上の快楽を発見しては、どこまでも際限がなくなつていくのであつた。

そして、傷つけられるのは、いつも蘭子であつた。彼女のなめらかな太ももからほとばしるなま暖かいねっとりとした血潮の感触が、盲獣を喜ばしたのはもちろん、傷つけられた彼女にも、こよなき快楽であつたとは、なんとという驚くべき事実であろう。彼女は痛みを感じないではなかつた。悲鳴を上げて、のたうちまわるほど、激しい苦痛を感じた。だが、その苦痛そのものが、とりも直さず快楽であつた。ドクドクと脈うちながら吹き出す血潮も快かつた。彼女は傷つけられることを望んだ。その傷が大きければ大きいほど、苦痛が激しければ激しいほど、彼女は有頂天になつた。盲目の夫も、最初の間は、妻の血のりを喜んだが、やがて、それにも退屈を感じ出した。蘭子の予期だにしなかつた執拗と貪欲にほとほとあきれ果ててしまつた。蘭子の存在がうるさく感じられ、いとわしくなつて来た。はてはあのように恋い慕つた彼女を憎悪し始めたのである。

そして、「……さあ、もつと、もつとひどく、傷をつけて！ いっそ、その肉をえぐりとつて！」と、身悶えする蘭子を前にして、かれはどうとう恐ろしい計画を立てるのであつた。それは、「……そんなに傷つけてほしいのかね。そんなに痛い目があったのかね。よし、よし、それじゃ、おれにいい考えがある。お待ち、いまにね、おまえが泣き出すほど、うれしいめに合わせてやるからね」と、かれは刃物を蘭子の腕に当てて、ぐんぐん力を込めていった。蘭子は、「アツ、アツ」と悲鳴とも、快感のうめき声ともつかぬ叫びをたてて、激しく身悶えして、「……もつとよ、もつとよ」と、「……よしよし、さあ、こるか」と、盲目の夫は、終に刃物に最後の力を加えてしまつたのである。メリメリと骨が鳴り、そして、アツと思う間に、蘭子の腕は、彼女の肩から切り離されてしまつた。滝つ瀬と吹き出す血潮、まるで網にかかった魚のようにピチピチとはねまわる蘭子の五体。「……どうだね、これで本望かね」と、夫はやみの中で、薄気味わるい微笑を浮かべていた。蘭子は答えなかつた。答えようにも、彼女はすでに、意識を失つてしまつていたからだ。それから数十分後、やみの中で、手は手、足は足、首、胴とばらばらに切り離された蘭子の五体の上に倒れ伏して、号泣している盲獣の姿があるだけであつた。

## 十、雪女郎

それから二、三日後、場面は一転して、雪の銀座街であるが、それは、宵から降り出した大雪のため、深夜の銀座通りは、一夜で雪景色へと変わつていたのである。そして、スキー用具を持ち出して、スキーを始める人や、店の小僧さんたちは、大きな雪だるまなどをつくることに忙しかつた。その中に、等身大の婦人裸体像をせつせとつくつていくひとりぼっちの盲人があつた。かれは、断髪裸体の雪女郎をつくつてしまうと、近くに待たせ

ていた自動車に乗って、さっさとどこかへ引き上げてしまった。……

翌日、早朝から人だからが絶えなかった。盲人手細工の断髪雪女郎は、銀座一帯での最高傑作として、人気の中心となった。新聞社の写真班も、しばしばカメラを向けたとある。それは、一体、なぜか？ それは、彼は、まさに裸婦像専門の「彫刻家」であり、それゆえ、雪だるまでもその「技量」は遺憾なく発揮されているのである。そして、午後になると、暖かい陽光のために、断髪と顔面の見境がつかなくなり、片腕ももげて醜くなってしまうたが、その人気は衰えなかった。それは、会社帰りの紳士が立ち止まり、学生が立ち止まり、そして、小僧たちが立ち止まった。さらに、女学生までが、クスクス笑って立ち止まった。やがて、いたずら小僧が、雪女郎（雪女）のおへそをめぐらして、雪つぶてを投げつけると、その断髪雪女郎は、おへそから上の方が倒れて砕け散ってしまった。

すると、一人の盲人が、「……もしもし、今のは雪だるまのこわれた音ですか？」と聞くので、隣の人は、「ええ、そうですよ」と応えると、その盲人は、「……あなた、その雪だるまの足をこわしてごらん下さい。足だけ残しておいたって、つまらないじゃありませんか」と言うので、隣の人は、言われるままに、二、三步前に出て、くつで雪女郎の二本の足をけとばすと、なんとコロコロところがりながら一尺（三十センチ）ほどの青白いかたまりが出てきて、一人の学生が、なんだろうと近づいて見てみると、それは、なんと「人間の足」であり、ギヤツという叫び声とともに、群衆の視線がいつせいにその一物に集まるが、それは、たしかに人間の、しかも女の片足であった。たちまち群衆の数が増えて、知らせを受けた警察が駆けつけるといふ展開になるが、盲人は、「……おや、この騒ぎは、いったいなにごとですかい？」と聞くと、隣の人は、「……なにね、雪女郎の中から、ほんとうの女の片足がころがり出たという騒ぎさ」と言うので、「……へええ、女の片足がね、驚きましたね、いったいなんの気で、そんなとんでもないいたずらをしやがったのでしようね」と、不気味に低い笑い声をたてたかと思うと、ひよいと向きを変えては、つえを力にとぼとぼとその場を立ち去るのであった。

## 十一、足のある風船

ところで、水木蘭子には、まだ「首と、胴体と、二本の腕と、一本の足」が残っていることになる。盲獣は、それらのものをいかに処分したか、それについて書いてみたいとある。——それは、雪だるま事件があつてから四、五日たつと、雪どけのぬかるみもかわき、変わつて朗らかな小春びよりが来た。舞台は浅草公園、観音さまのお堂の前だ。敷石道には、数十羽のハトが、子供の投げ与える豆をつついていた。露天商人の客を呼ぶ声やジャンタジャンタの古風な楽隊の音が聞こえる中で、ハトのまわりには、五、六歳から七、八歳のわんぱく小僧が十人ぐらい群がっていたが、そのうちの一人が空を見上げては、「……やあ、風船だ、風船だ」と騒ぐと、なるほど、青いの、赤いの、白いの、二、三十もある風船玉が、ひとかたまりになつてふわふわと飛んで来るのであった。その結び目になんとか大きなものがくくりつけてあり、その重みで、風船は徐々に浮力を失い、いまにも落ちてきそうに見えた。「……おい、追っかけて拾おうよ」と、ひとりの子供が言うと、子供たちは賛成をして、みんなその風船をおいかけることになった。

やがて、その風船は広っぱの大イチョウの枝に頭をぶつけながら、子供たちの手がうじ

やうじやと群がる中へと降りてきた。そして、おびただしい競争者たちに打ち勝って、その大きな包みを抱え込んだのは、案外にも、七つばかりの小さな子供であり、みんなに奪われまいと走り出したが、行く手の鉄柵てつさくのところまでまごつき、みんなに追いつかれて、奪い合いになるが、やがて、一人の老人が、「……おい、おい、よさないか、おまえたち何を争っているのだ。風船なら、みんな飛んでいってしまったじゃないか」と言いながら、折り重なっている子供たちを起こしては、一番下の子供に、「……さあ、起きた、起きた、お前は何かをつかんでいるんだ」と言いながら、「……おい、おまえ、それはいったいなにか」ということになるが、それは、その子供が抱きしめている一物に、五本の指がはえていたからである。それを見て、老人は、「……人間の足だ。おい、たいへんだ。早くおまわりさんをおいで」と、どもりながら、指図するのであった。そして、そのうわきは、たちまち公園じゆうにひろがり、ひょうたん池のふちの高台のベンチでも、「……ゴム風船を二十も三十も集めて、それに切り離れた人間の足をぶらさげて飛ばしたやつがあるんですって、美しい女の足首だったという事ですぜ」と、職人風の男が話すと、「……ほう、ひどいやつですね。してみると、人殺しがあつたのでしようかね」と、ベンチに腰かけていた醜い盲人が言うのと、「……てつきり、そうだね。女を殺しておいて、手足をばらばらに切りきざんだのかもしれないね。おお、いやだ」と言い、「……で、その足首を、よりによってこのにぎやかな浅草の空へ捨てたってわけですかね。フフフフ、飛んでいくところは、さぞかし見物みものだったでしょうね」と、陰気な含み笑いをするのだった。

## 十二、冷たい手首

さて、同じ日の夜ふけ、日比谷公園裏の官庁ばかり建ち並んだ非常に寂しい往来を、ひとりの青年紳士がぶらぶらと歩いていた。付近のシナ料理店で開かれた宴会の帰り道であり、かなり酔っ払っていたのである。十二時近かつたので、まったく人通りがとだえていた。青年紳士は、ふと行く手に何かしらうごめいているものを発見するが、それは、だれか一人の男が大地に四つんばいになって、まるで犬のように地面をかぎまわっている様子であった。「……きみ、きみ、そこで何をしているんだ。しつかりしたまえ、みつともないじゃないか」と言うのと、「どなたですえ」と言いながら、「……へへへ……犬のまねじやございませぬよ。実は、つえをなくしましてね。わたしやめくらなんです。つえがなくはひと足も歩けないのです。へへへ……」と言うのであった。そこで、酔っ払いの紳士は、街灯の明かりをたよりに、いっしよになって探してやるが、どこにもつえらしいものは見あたらなかった。そこで、「……きみ、どこへ行くんだね、遠方かね」、「……へえ、〇町まで行くんで」と言うので、「……〇町だつて？ わかんないな、まあいいや、連れて行ってやろう。その辺でつえを買ってやろう。来たまえ、手を引いてやるから」と言うのと、「へへ……恐れ入ります」と、盲人は、恐れ入りながら右手をさし出すと、紳士は、盲人の手を握って歩き出すが、「……ワーツ、なんて冷たい手だ。君の手はまるで死人みたいだね」と言うのであった。もちろん、それは、蘭子らんこの「右手」であつたのである。そして、歩いて行くと、立派なショーウィンドーの雑貨店があつたので、「……さあ、きみ、ここできてみよう。ステッキがあるかどうか。ね、きみ、ステッキさえあれば、ひとり歩けるね……おい、返事をしないか、あんまさん」と、びつくりして振り返って



みると、今までいたはずの盲人が影も形もなくなっている。そして、右手を持ち上げてみると、主人なき手首もいっしょについて上がった。「……おい、いたずらはよせよ。いやだせ、おどかしちゃ」という展開から、「……だれか来てくれ、助けてくれ」となり、たちまち人だかりになるのであった。そして、その人だかりのうしろに、帽子をまぶかにした黒めがねの男が立っていて、「……なにごとですえ？ 酔っ払いがどうしたのですかね」と聞くと、隣の人は、「……人間の腕をつかんでいたんですよ。どこで拾ってきたんだか、物騒な男ですね」と応え、「……へえ、人間の腕をね、酔っ払って、人でも殺してきたんじゃないませんか。それで、男ですか、それとも、若いべっぴんの手首ですかい」と聞くので、「……こらんさい。白くてスベスベした若い女のらしいですね」と応える。すると、「……ところが、わたしや目が見えませんのでね。へへ……若い女の手首ですか、すこうござんすね」と、笑ったかと思うと、盲人は、どこで手に入れたものか、もうちゃんとなつえをついて、さっさとその場を立ち去っていったのである。

### 十三、クモ娘

また、それから二日ばかりのち、今度は、両国国技館裏の見世物小屋で、またしても異常な珍事が起こった。そのの広っぱには、常小屋ではなく、ときどき地方回りの小さな見世物がかかることがあり、ちよūdōそのとき、クモ娘の見世物がかかっていた。その「クモ娘」というのは、妙な階段のようなものの中ほどに娘の首が乗っていて、その首を中心にクモの糸になぞらえたひもを張り巡らし、首の周辺には作り物の大グモの足が八本ひろがっている。つまり、網の上を、人間の首を持った大グモがはっている形に見せかけたものであり、娘は、階段よりの箱の中へ身を隠し、首だけを上部に現わしているものである。そして、夜の九時ごろ、クモ娘とて、食事もすれば、ご不浄へも行くので、ちよūdō娘の合図があったので、一時客止めにして、中の客の出るのを待って、娘を箱の中から出してやったのだが、小屋の裏へ出ていったかと思うと、知らぬ間に帰ってきて、ひとりで箱の中へ入ってしまった。ふだんは少しでも外に出ていたがる娘が、きょうはばかに神妙だと思ひながら、親方はまた客を集めはじめた。

それは、「……さあ、いらはい、いらはい、これが有名なクモ娘、胴体がなくて、首から八本の足がはえている。さあ、これからちよūdō浅草小唄を歌うところです。首ばかりのクモ娘が歌をうたう。こらんさい。これが、この看板どおり一分一厘違わない恐ろしいクモ娘だ」と、親方は、いつものしわがれ声で、陰気な口上をしゃべり続けるのであった。——これは、遠い昔、子供の頃、祭りや縁日の時などには、よくサーカスをはじめ、おぼけ屋敷やいろいろな見世物（例えば「へび女や珍獣何々」とか）がかかったものであり、大きな絵の看板とともに、独特の口上で巧みに客を集めていたものである。

さて、客が集まると、「……さあ、愛ちゃん、浅草小唄を歌うのだよ」と言っても、いっこうに歌い出そうとしない。客たちは何か変だぞという異様な感じに襲われていると、突然木戸口のところで、「……アツ、おまえどうしたんだ。どこへ行ったんだ」、「……こめんさい。ちよūdōとあすこの夜店を見ていたんです」、「……うそをいえ、また焼き鳥の立ち食いをしてきたんだろう。これからそんなことをすると、承知しねうぞ」という展開になるが、そうすると、中の階段に首をさらしているやつは、いったい何者だというこ

とになり、親方は、「……おい、おまえだれだ」と、どなったが、階段の首は黙っている。そこで親方は、つかつかと階段に近づいて、娘の髪の毛を持ってぐいと力いっぱい持ち上げると、なんと娘の首の下には、何も無い、胴体のない生首だけであり、「ワツ」といって、思わず手を離すと、生首は何か生き物のように、コトン、コトンと階段をころがって、見物たちの足下へ飛びついていった。「キヤツ」ということで大騒ぎになり、近所の交番のおまわりさんも駆けつけることになるが、例によってそこにひとりの盲人がまじっていて、「……いったい、どうした騒ぎでございますね」と聞くが、誰もその盲人を相手にしようとはしない。やがて、木戸口から、とんきような叫び声が響き、それは、「……ああ、こ、この女、おれは知っていますよ。こりや、もと浅草の帝都座に出ていたレビューの踊り子でさあ、水木蘭子という女でさあ」と言うので、「……ああ、そうですかい、水木蘭子ですかい、かわいそうになあ、フフフ……」と、盲人はひとりごとをつぶやきながら、とぼとぼとどこかへ立ち去っていくのでした。

#### 十四、めくら湯

さて、水木蘭子殺害さるといううわさは、パツと東京じゆうにひろがった。警察はめざましい活動を開始したが、下手人は少しもわからぬ。下手人の代わりに、蘭子のからだの部分、すなわち、二本の足と一本の手、そして、一つの生首、それらを寄せ集めて調べてみると、確かに同じ年配の、同じ体質の、美しい女のからだであることがわかった。では、残りの片手と胴体はどうなったのか。これも必ずどこか意外な場所にくらがっているに違いないと、刑事は血眼になつて走りまわるとともに、新聞の方も大きな見出しで、書きたてたのである。すると、さっそく、ある屠牛場から届け出があった。血まみれの牛の臓物のおけの中に、こまごまに切り刻んだ人間の骨や肉がまじっていた。その分量を合わせてみると、どうやら蘭子の胴体と片手に相当するということであった。

やがて、事件は迷宮入りになるが、それは、犯人は、まさに警察たちの目の前にいたのであるが、つえにすがつた不自由な盲人が、まさかこんなたいそれた罪を犯そうなどとは、誰も想像さえし得なかつたからである。それから三ヶ月ほどたつたある日のこと、新宿の盛り場の、滝の湯という大きな銭湯の勝手口へ、ひとりのめくらがたずねてきたのである。そして、「……ごらんのとおり、あんまを渡世にしている者でございしますが、この節の不景気で思わしく仕事もなく、そこで思いついたのがお湯屋さんの三助でございします。お湯であたたまったからだを、裸のままもみほぐすのは、それは気持ちのよいもので、こちらのようなご繁盛のお湯屋さんには、そういうあんまがあつてもじゃまにはなりませんまいし、また、流しの方も、なあに、できないことはございませぬ」と言うのと、「……なるほどね。あんまの三助か、こいつは存外あいきようがあつておもしろいかもしれないね」ということで、翌日から滝の湯の流し場で、めくら三助が働き始めるが、それが評判になり、めくら三助に一度もませてみようじゃないかと、遠方からわざわざやって来る客もあり、女湯では、最初気味わるがっていたが、顔に似合わぬひょうきんもので、おもしろいむだ口で人を笑わせたりするものだから、あんまの三助、あんまの三助、と、ひっぱりだこになり、今では「滝の湯」よりも「めくら湯」で通るほど有名になつていたのである。

## 十五、真珠夫人

ところで、女湯のなかに、真珠夫人と呼ばれるきわだつて美しいからだの持ち主があった。『パール』という有名なカフェのマダムで、もう三十をよほど過ぎた年増ではあったが、顔も美しく、ましてそのはだはまるで小娘のようになめらかで、健康に張りきつていて、まるで男を知らぬかと疑われるほど、ういういしく見えた。そして、真珠夫人は、滝の湯の常連であり、来れば流しをとり、流しをとれば必ず例のめくら三助に頼むことにきめていた。ある日のこと、例によって、銭湯にやってくるまで、めくら三助に流させていたが、まだ十時を少しまわつたばかりでひとりの客もなく、黙っているのも変なので、ふたりは何か世間話を始めた。「……番頭さん、こうして毎日、女の子のからだをなでまわしているのも、いいかげんうんざりするだろうね」と聞くと、「……どうして、どうして、わたしやこんな楽しみなことはありやしませんよ。めくらのことで、女の顔を見て楽しむということはありませんが、わたしどもは、女は顔じゃありませんよ。からだです。からだのからだが、はだのよしあし、それを手の平で探つて、ははあ、この人は美人だな、この人はさほど美しくないなどと、ちやうど目あきが顔を見て品定めをするように、めくらは指先で女を見るのです」と言うと、真珠夫人は、わたしはどっちかね、と聞くので、「……エへへ、ご冗談でしょう。奥さんが評判の美人だつてことは、いくらめくらでも、ちゃんと知っていますよ。お顔は分かりませんが、からだでいやあ、あたしや、こんな美しいからだは、生まれてから初めてです。このお湯へ来る何百という娘さんを束にしたつてかないっこない、千人にひとり、万人にひとり、いや、千万人にひとりっておからだです」と褒めながらも、「……だがね、たつたひとりだけ、奥さんとよく似たからだを知っていますよ。それは、レビューの踊り子の水木蘭子だ」と言うと、「……エ、水木蘭子だつて、あのむごたらしい死に方をした。おお、いやだ」と、夫人は、ぞつとしたように肩をすくめるのであった。

## 十六、肉文字

やがて、一人ふたりと新しい客がやって来たので、この不思議な会話はそれきりになつてしまつたが、そのことがあつてから、三助の指の動きぐあい、夫人のからだのくねらせ方で、冗談を言い合つたり、あいさつをし合つたりできるほどになつたのである。真珠夫人は、この醜い盲人に異様な好奇心を持ち始めたように見えた。それというのも、めくら三助の技術には特殊の魅力が潜んでいたからでもあつた。かれは、裸体あんま術にかけては、不思議な腕まえを持つていた。ぬめぬめとすべる石けんのおぼくの上を、十本の指が、大グモのように、快い拍子を取つてはいまわる。その指の下で、客の肉体は、水まぐらのようにダブダブと波打つのであつた。そして、客たちは、まるで催眠術にでもかかつたように、目を細めて、かれらの裸体をめくらの三助のもて遊ぶがままに任せていた。不思議な陶酔境である。真珠夫人も、その陶酔者のひとりであつた。ことに彼女に対しては、三助のほうでも腕によりをかけて、普通客の二倍三倍のもてなしをするものだから、その効果もいっそう大きく、今では真珠夫人は、「めくら湯」に来るのが楽しい日課になつていたほどである。めくらの三助は、まさにそうなることをずっと待っていたのである。

そして、めくらの三助は、その真珠夫人の背中に今度は文字を書き始めるのである。それを毎日毎日繰り返すことによつて、最初は、それが何であるかまったく分からなかったが、やがて、それと気づくのであり、真珠夫人は、なにくわぬ顔をしながら、背中にはだに注意力を集中して、一字一句拾つてみると、それは、「コンヤージミツコシノウラデマツ」（今夜一時三越の裏で待つ）というものであった。真珠夫人は、最初、「……このわたしにあいびきをもとめているのだわ。なんてこつけないんだらう」と思い、相手にもしなかつたが、やがて、このめくらの三助にやさしいことばの一つもかけてやれば、それをうれしがつて、奴隷のようにわたしの足にひざまずくのだらう。それも一興だと思ひ、ひとりごとのように、「……ええ、そうするわ」と、いろよい返事を与えてしまふのである。まさかこのめくらの三助が、あんな恐ろしい男とは知る由もなかつたのである。

その夜の一時、真珠夫人は、約束の三越の裏へと出かけて待つてしていると、やみの中から、つえにすがつた盲人が、まっすぐに夫人のそばへ近づいてきて、「奥さんですか」と、異様なささやき声がし、「……ええ、そうよ。おまえさんの頼みを聞いて、わざわざこまで来てあげたのよ」と言つと、「……ありがとうございます。わたしやこれで本望ですよ。でもよく、わたしみたいなものの頼みを聞いてくださいましたね。ありがとう、ありがとう」とうれし涙にむせぶのであった。「……で、どうするの？　こんなとこに立つていたつてしようがないわね」と言つと、「……まあ、わたしにお任せください。車を雇つておきましたから、ともかくあれに乗つてください」と誘つては、美しい三十女と、醜い盲人、なんとも形容のできない不思議な取り合わせの客を乗せた車は、深夜の大通りを、いずこともなく走り去るのであった。

## 十七、紫檀の太もも

さて、それからどのようなことが起こつたか、それは、真珠夫人もやつぱり例の不気味な人体彫刻のあるあの地下の密室へと連れ込まれては、そこでありとあらゆる情痴の遊技をし尽くしたことは、かつての水木蘭子の場合と大差はない。ほとんど同じ狂態が演じられ、ほとんど同じ会話がとりかわされ、真珠夫人もこの恐ろしき盲獣の前に完全に降伏してしまつたのである。それは、一体、なぜか？　それは、たとえ頭の「知性や理性」などでは嫌つていたとしても、その身体への強い「刺激や快感」などを無理やりでも一度受け入れて心を許してしまうと、相手が誰であるかよりも、その「身も心もしびれるような強烈な刺激」が忘れ難くなり、それゆえ、その「身も心もしびれるような強烈な刺激」を渴望して、次第に自ら積極的にその世界を受け入れるようになってしまふ傾向があるのである。それが、まさに「マゾサド世界」（つまり「被虐・加虐」世界）の非日常的な強烈な「刺激世界」や「感覚世界」が成り立つ理由の一つになるのである。そして、真珠夫人も、それを離れてはもはや一日も生きていけないほどにのめり込んでしまつたのである。

さて、盲獣の奇怪なる魅力におぼれつきた真珠夫人は、床の巨像の冷たい紫檀のはだにぐつたりと身を投げて、目を細め、筋肉の力を抜いて、全身を相手のもてあそぶがままに任せていた。すると、盲人は、「……わしはこうしておまえのからだをなでていると、どうもあの水木蘭子を思い出してしかたがないのだよ」と言つ。すると、真珠夫人は、「……まあ、おまえさん、どうもあやしいよ。わたしみたいにして、あの蘭子を手に入れたこ

とがあるのじゃない？」と聞くと、「……うん、実はね、驚いてはいけないよ。わしは蘭子をここへ連れ込んだことがあるのだ」と言い、さらに加えて、「……わたしたちは半年近くもここでふざけ暮らしていたのだよ。そして、わしはもう飽き飽きしてしまったのだ。そこで、とうとう決心したのさ、蘭子を殺してしまおうとね」と薄気味わるく告白するのであった。夫人は、「……まあ、こわい。むろん冗談でしょ。わたしびっくりするじゃないの」と言うと、盲人は、「……蘭子もそう言ったよ。『冗談でしょ』ってね。だが、冗談ではなかったのさ。いつの間にか、あの女の腰に太いなわを巻きつけていたのさ」と言いながら、ほとんど裸体の真珠夫人の腰に麻なわを巻きつけていた。もちろん、蘭子の殺害の時には、そんなことはしなかったが、何もかも蘭子の時とそっくりだと思わせることが、犠牲者をどんなに震え上がらせるかをよく知っていて、その恐怖がながめたかったのである。それは、「……美しい女の死にも狂いの恐怖をながめる、必死に身悶え喘ぎ苦しみ叫ぶ表情をながめる、あの限りなき悦楽に耽りたかったのだ」と、まさに「加虐（性的サディズム）心理」そのものを語っているのである。

## 十八、巨人の口

さて、真珠夫人は、「いけない、いけないいたら……」と、夫人の腰に食い入るなわをはずそうともがきながら、さらに、「……おどしちやいや、ねえ、あんた、うそだわね。うそだとおっしゃい。でないよ、わたし……」と言うと、盲獣は、「……妙だね、蘭子もやっぱり、そのとおりのことをいって、わしに哀願したものだよ。だが、わしは許さなかった。許すかわりに、隠し持っていた短刀を抜き放って、ギラギラと振って見せた」と言いながら、横たわっている真珠夫人の首筋へ、その氷のような刃先を、ぺたぺたと当てるのであった。夫人は思わず「ヒイ」と悲鳴を上げて、やっぱりほんとうだ。このぶきみな盲人は、本気で私を殺そうとしているのだと、あまりの恐ろしさからだじゅうの血が凍るかと思われたほどであった。そして、真珠夫人は、死にも狂いで盲人の手をはねのけて、巨人のもの滑り台を、こけたりすべったりしながら逃げまどうのであった。

それは、まるで真つ白な大きな猿まわしのサルのように、木製のおしりの山をよじ登り、あるいはゴム製のお乳にすがり、あるいは手や足の林を分けて、哀れに逃げまどっていたが、盲人の手には麻なわがしっかりと握られていたのである。そして、「……ほら、逃げろ、逃げろ、さあ、今度はそこへよじのぼのだ。その大きな口のほらあなへ逃げ込むのだ。蘭子もやっぱりそこへはいったものだよ」と追い立てられながら、真珠夫人も、結局は、ヤドカリが貝がらにもぐりこむように、ゴソゴソと巨大な口のどのほうへはい込んでいった。すると、盲獣は、「……ハハハ……そこでどうとう袋のネズミだね。ハハハ……こわいかね。震えているね。ほら、どうだ、少しはチクチク痛むかもしれないね」と言いながら、巨人の口からはみ出している夫人のあしとしりをチクリチクリと突くと、突かれるたびに、真つ白な皮膚に、美しい紅の絵の具がにじみ出て、巨大などの奥からは、ヒイ……ヒイ……と悲鳴が漏れてくるのであった。

## 十九、女どろぼう

それから、真珠夫人（死後）は、一体、どのような運命を辿ったのか？ それは、次のような内容になっている。――まず、小石川区のS町に絹屋という古風な呉服店があった。それは、昔ながらの店構えで、番頭小僧が前だれがけで、畳敷きの店先にそろばんを前に控えているという呉服屋であり、その店に、深夜、大胆不敵な女賊が押し入ろうとしたのである。その絹屋では店をしまうと、昔風の江戸をおろして、店員たちは、とりかたづけた店の間にふとんを並べて、番頭から小僧にいたるまで（合計五人が）昔風に休むことになっていった。そして、夜の十二時を過ぎると、表通りにはばったりと人の足がとだえ、三十分ごとに拍子木をたたいて回る夜番のほかには、店員たちの大小のいびきや歯ぎしりなどが聞こえてくるだけであった。

さて、深夜二時、さつきから、表の江戸の下にコンコンと異様な物音がしているが、熟睡していて、誰もそれに気づかない。三十分ほどそのひそかな物音が続いていたかと思うと、江戸の下の地面にトンネルみたいな穴ができて、そこから白いものが、へびのかま首のようにニューツとのぞいた。それは、どろぼうの手首であり、江戸のくるるをはずそうとしていたのである。一方、小僧の一人がたまたま寝返りをうった拍子に、若い番頭の腹の上へ、ドシンと乗っかり、それで番頭が目をさますことになる。最初、寝ぼけていて、それを見た時は、何か白い犬かダイコンのお化けかと思ったが、やがて、どろぼうだと気づき、そこでもう一人の番頭を起こしては、二人でどろぼうを捕まえようとしめし合わせて、一、二、三で、その手首に飛びつき、またたくまに手首をグルグル巻きにしぼり上げては、「……おい、だれかだんなさまに申し上げろ、それから警察へ電話をかけるんだ」と、どろぼうを見事に捕まえて有頂天になるが、一方、外のどろぼうはウンともスンともいわず、不気味に黙りこくって、ただ縛られた手首だけが踊り狂っている。やがて、ぐつたりとなり、外で何かゴソゴソと音がするので、なにか変だと思い、力を込めて手首をひっぱってみると、その手首はズルズルとこちらへ抜けてくるのであった。

それを見て、「ア、血だ、血だ」、「やりあがったな」ということになり、それは、どろぼうがわが身を全うするために、われとわが腕を切り離して逃亡したのだ。「……なんとこの荒療治、なんとという大胆不敵なしわざであろう」と、震え上がるのであった。しかも、「……おい、これは男じゃないぞ。すべっこい女の腕だぜ。この細い指を見たまえ」ということで、どう見ても女の腕だ。では、女盗賊だったのか。女のくせに、こんな思いきつた荒療治をやつてのけたのか、と、一同シーンと静まり返ってしまったのである。

## 二十、怪あんま

さて、「……腕を切つて逃亡した大胆不敵の女賊」記事が、翌日の新聞をにぎわせることになった。むろん、警察はこの片腕の主を手を尽くして捜し求めたが、女賊は影さえ見えなかった。しかも、驚くべきことは、その事件の翌々日、今度は河岸を変えて、大森のある質屋に、同じ手口の賊が押し入ろうとした。そして、絹屋呉服店と同じ惨事がひき起こされたのである。あとでわかったことであるが、その同じ夜、女賊は大森で三カ所も、例の土を掘って手首を入れるやり方で忍び込もうとしたが、どこでも家人に騒がれて目的を果たせず、最後にねらった質屋で、その若い番頭は、同じように室内に侵入した手首になわをかけるが、女賊はまたもやわが手を切り離して逃げ去ってしまった。そして、絹

屋の手首は右、大森の質屋の手首は左、共に軟らかい女の腕で、両方とも同一人物のものであることが確かめられたのであった。

「……もつともね、質屋へ入った時には、もう右手はないのだからね。きつと相棒がいて、女賊の腕を切ったのだろうといううわさだよ」と、絹屋呉服屋の奥の間では、主人があんまに肩をもませながら、新聞を前にして、女賊の話をしていた。あんまは、「……すると、なんでございますね。その女賊は、両手とも切ってしまったって、あの妻吉という芸者みたいな姿になってしまったのでございますね」と、あいづちをうった。「……うん、恐ろしいことだよ。なんとという強情がまんやつだろうね。それに、驚いたことは、大森へはいったのは、わしの家で右手をなくした翌々日なんだぜ。たいていのものなら、傷の痛さに熱を出してウンウンうなっていないかならぬはずだからね。こわい女だよ」、「そうでございますね。人間じゃありませんね。それで、そいつはまだつかまらないのでございますか」、「……うん、少しも手がかりがないのだそうだ」と続くのである。

ところで、「……おまえさん近所かね。はじめてのようだが」と聞くと、「……いえ、だいぶ遠方でございますよ。不景気でございましてね。こうして笛を吹いて流して歩かないと、おまんまがいただけませんので、へへ……」と言い、一方、主人は、しばらくすると、「……ああ、ちよつと待っておくれ、ご不浄へ行つてきますから」と、主人は立ち上つて、縁側へ出ていくのであった。すると、あんまは、スルスルとうしろのタンスへはいよつては、小引き出しに手をかける。実は、さつき使いの者が持つてきた大金が、その引き出しにしまわれたことを、目こそ見えぬが、鋭い勘の方で、ちゃんと覚えていたのである。そして、サツと中の一物を取り出してはふところのねじ込むと、引き出しをしめて、もとの席へもどり、なにくわぬ顔で指をボキボキ折りはじめるのであった。盲獣が彼の「悪行の資金」を調達する方法は、およそかくのごときものであったのである。

さて、盲獣は、なぜ、いつも「手や足」などを捨てた現場、現場にその姿を現わしては、その現場にいる人と「会話」を交わしているのだろうか？ それは、人々にどれくらい大きな「驚きや衝撃或いは恐怖やその他」などを与えているのかを自ら生で実感して悦に入りたいからであると共に、もう一つは、目の前に犯人がいるのに、それに気づかない警察を初めとして、世間の人たちの愚かさを見てあざ笑ひ、そして、「……誰にも自分が犯人だとわかるはずがない」という、いわば「完全犯罪」を気取った（自慢するような）一種の「優越感や達成感」などからも自ずと生じて来る、「犯罪者心理」の一つになるのだろう。

## 二一、砂遊び

さて、大森の事件から二、三日後、舞台は鎌倉由比ヶ浜の海岸へと変わる。その日はひどくむし暑い日で、まだ六月なかばというのに、海は気の早い遊泳者でかなりにぎわっていた。そして、色とりどりのパラソルが、砂浜に五色のキノコとはえて、肥えたの、やせたの、白いの、黒いの、あらゆる形の肉塊が、寝そべったり、座ったり、泳いだり、走ったり、はねたりしていた。また、砂遊びに興じるものもあり、。例えば、砂の中へ埋められている人や、大小様々な砂山や砂の城を作ったり、また、砂で大きな裸体の臥婦を描いて曲線を楽しんだり、その他、それらの砂遊びの人々のなかに、紅白だんだらの水着を着た奇妙な盲人がいて、かれは朝早く、海岸に人気もない時分から、もう砂遊びを始めて、

終日それを楽しみ、夕暮れ人々が帰り去ったあとまで居残っていた。この醜い盲人にも、とびきり美しい恋人がいて、その首まで砂に埋まった美しい人のそばに寝そべて、あきず話し合っていたが、女は美しい胴体を砂に埋めて、首と足だけを出して、その足の先をピンピンさせながら、かん高い声で笑った。「……なんとむつまじいだろう。あのめくら、きつと金持ちなんだぜ」と不良どもがささやき合っていた。そして、夕方になると、海岸の人々やパラソルなどは、どんどんと減って、盲人もいつの間にかいなくなった。広い夕暮れの浜辺に、見渡す限り三人きりであり、そのうちのふたりは、恐らく、生まれてはじめてのあいびきで帰りを忘れた若い男女であり、そして、もう一人は、首まで砂に埋まっている美しい人だけであった。

さて、あいびきの若い男女は、夢中で話し合っていて、気がつく、「……まあ、だれもいなくなっちゃったわ。もう日が暮れそうだね」と、少女が言うと、青年は、「……うん、でも、もうひとりいるよ」ということになり、「どこに?」「ほら、向こうの浜辺に」となり、少女は、「……あの何をしているのかしら? リュウマチの療法、それとも苦行をしているの?」と聞くと、青年は、「……ぼくはね、お昼頃から、あの人を見ているんだよ。少し変だね」ということになり、そこで「オーイ」と呼んでみても、何の返事もない。そこで二人は、その女性のところまで行って見ると、「……おい、ごらん、眠っているんだよ……でも、おかしいね、この人、化け物みたいな大女だよ。足があんなところにあるよ、この人、七尺(約二肘十寸)もあるぜ」と言うと、「キヤー」と、おびえた娘さんは、砂を蹴っていちもくさんに逃げ出してしまふ。そこで、青年は、「……きみ、きみ、カゼをひきますよ。起きたらどうですか……おや、こいつはいけない。死人だ」ということになり、だれか呼んでくれ! と叫び、やがて屈強の浜の若者三、四人が駆けつけ、その砂に埋まっている美しい女性を掘り出してみると、何とその死美人には胴体がなかったのである。首はある、足もあるが、中間の胴体が空虚であった。一同はゾーツとして、夕やみの浜辺は、今までの寂しさにひきかえて、たちまち黒山の人だかりとなり、「殺人事件だ、殺人事件だ」と、群衆の間に恐怖の聲が騒然としてわき起こったのである。

## 二二、寡婦クラブ

さて、東京市中には、例えば、まじめな、あるいは淫蕩な未亡人たちのクラブが幾百となく存在することだろうが、美人寡婦「大内麗子」が加入していた小クラブは、その後者に属する極端なものであり、会員は年長四十歳から、最年少二十五歳の麗子を加えて四人、赤坂区のとある家を借りて、月に二回ずつ秘密の寄り合いをし、今夜もその会合があつて、四人のあぶらぎった未亡人たちは、しめきった二階座敷に車座になって、奇怪な秘密話にふけていた。時は、初秋、この前の「海岸生首事件」から二ヶ月ほど後の話である。

まず、「……で、そのめくら三助っていうのは、いったいどんな男ですの?」と、最年少の「大内麗子」が聞くと、「……あんた、ごらんになったらゾツとするわよ。きつと」と、四十歳の「松崎未亡人」が応えると、「きたない男?」「……ええ、きたないよりも、恐ろしいのよ。あたし、上野動物園でいつかあんな顔を見たことがあるわ、虎やランオンとは違う、もっと小さく、陰険な、それはいやらしいけどものよ」と言うと、「……でもどこかたまらなくいいところがあるんでしょ。あんたが、わざわざ今夜紹介してくださる



くらいだから」と、三十五、六歳のつやつやとしたあから顔の「下田未亡人」が口をはさんだ。すると、「それはモチよ」、「……あんまり評判が高いもんだから、わざわざそのお湯屋へ行って見たのよ」、そして、「……番が来て、そのめくら三助があたしの肩につかまると、驚いた。とても口では言い表わせやしないわ、あのじょうずなもみ方っていうものは」、「……ほんとうに目が細くなっちゃうの……とにかく、あの指はすばらしいものよ」と、四十歳の「松崎未亡人」は言うのであった。

やがて、当の「めくら三助」が到着をして、案内されて二階へと上がり、スーツとふすまを開けて、盲目の醜怪物が顔を出すと、初対面の三人の未亡人たちは、ややわくわくした気持ちで、この珍重すべき盲人をながめ、そして、もう一人の四十歳の「松崎夫人」は、「……ご苦労様、ここには、わたしのほかに三人のお若いご婦人がいらっしやるのよ。あなたの話をする、ぜひ一度もんでもらいたいと、首を長くしてお待ちかねなのよ」と言うので、「……へえ、ありがとうございます。わたくしも、ご婦人をもみませぬのが道楽でしてね。こんなうれしいことはございません。エへへ……」と応えるのであった。

そして、最初は、三十五歳の「下田未亡人」からであり、「……いかがでございますね、このくらいでは？」と、盲人はムカデの足のようにめまぐるしく動く指で、豊満なる未亡人の肩から背中、背中から腰、腰からおしり、おしりから太ももへと、もみ下げ、もみ上げながら、腕の躍動のため妙に震える声で尋ねると、「……ええ、けっこうよ。あたし強いほうですから」と言うと、盲人は、ひとしお力を加えて、グイグイともみはじめ、生きて這いまわる十本の指の下で、下田夫人の肉塊は、まるで巨大な水まぐらのようにダブダブ揺れ始めるのであった。そして、盲人は、「……失礼ながら、お顔はわかりませんが、あなたさまのおからだは、実に美しくうごきますね」と言うと、「……そう、手ざわりで、美しいか、美しくないかわかるの」と聞くので、「……エへへ、それはわかりますけれども、わたくしどもの美しいと申しますのは、あなたがたのお考えとは違い、わたくしの指という目で見るのであり、世間という美しさとはまったく違ったくらやみの世界の美しさでございます」と応えるのであった。

次は、最年少の「大内麗子」であったが、「……どう？ その人は、あなたの指では、美しい？ それとも美しくない？」と、松崎大夫人が無遠慮に訊ねると、例の生きている十本の指で、麗子の背中を一巡りまでまわしておいて、さて答えたものである。「……おや、こいつはどうも、恐ろしいほどの美しさだ。ほんとうのことを申しますと、わたしや生まれてから、こんなすばらしいおからだは、このかたでたった三人目でございます。エへへ……」と言うと、「……当たったわ、あんまさん、そのかたは、あたしたち女でさえほればれするような、それはそれは美しい人なのよ。顔も、はだも、そして年も、娘さんといつていいほど若いのよ」と、やっぱり松崎大夫人が応えるのであった。

そして、「……それはそうと、あんまさん、あなたが生まれてから三人という、そのほかのふたりは、どんな人だったの？」と、下田夫人が尋ねると、最初、盲人はなかなか言わずにもつたいぶっていたが、麗子にもぜひ聞きたいわと言われるので、やがて、「……びつくりなすつてはいけませんよ。ひとりには水木蘭子、ご存じですか、浅草に出ているレビューガールです。それから、もうひとりには、俗に真珠夫人と呼ばれていた『カフェ・パール』のおかみさん」と言うと、一同は一斉にシーンと静まり返って、「……まあ、おまえさん、それはほんとうなの？」となり、「……わたしたちも知ってるわ。聞けば、あの

恐ろしい犯人は、まだつかまっていけないというじゃないの」、「……ええ、つかまりませんよ。今の警察の腕前じゃあね」と言うのであった。すると、麗子も、「……まあ、いやだわ、あたしもあんな目に会うんじゃないかしら」と言うと、「へへへ……ご用心なさいませ。こういう美しいおからだのかたは、あぶのうございますよ」と、盲獣は、不得要領の笑い方（要領を得ないあいまいな笑い方）をするのであった。

### 二三、ゴム人形

さて、それから、四人の未亡人は、次々とふとんに寝そべって奇怪なもみ療治を受け、あるいはそれをながめて、いまわしき楽しみを尽くしたのであるが、それから一ヶ月後のある日、四人組の一人である「下田未亡人」が、「大内麗子」の自宅を訪ねてきた。それは、あれ以来、二度のクラブの会合にも顔を見せなかったもので、それを心配してわざわざ訪ねて来たのであった。そして、離れの洋館に案内されると、部屋にはすでに一人の洋装姿の婦人が大きなテーブルの前に行儀よく腰かけているのであった。それは、「……ハハハハ、これゴム人形よ。よくできているでしょう。麗子第二世なの」と言うと、下田未亡人は、「……まあ、ずいぶんね。でも、なんてよくできているんでしょう。麗子さんそっくりよ。それはそうと、こんなお人形を何になさるの？ この人とお話でもして遊ぶの？」ということになるが、やがて、麗子の手足やその他のゴム人形なども見せられて、下田夫人は、「……まあ、気味が悪い。ブヨブヨしているのね。しかし、こんな人形だとか、手足や、胴体や、生首まで作らせて、あんたいったい何をしようとしているの？」と聞くので、麗子夫人は、「……それについて、お話があるのよ」ということになり、「……実はあたし、あれからあのおんまさんに、たびたびあつていたのよ」、そして、「……これはただわたしの妄想で、なんの証拠もないんだけど、なんとなく、あれよ。ほら、第六感で、あたし、ちゃんとわかってしまったの」と言うのであった。

そこで、下田夫人は、「……まあ、何がわかったの？」と聞くと、「……あたしが近いうちに殺されて、手や足をばらばらに切り離されるってことが」と言うと、「まあ、いやだわ。おどかしちゃ」、「……だれがあんたを殺すって言うの？ それもわかっているの？」と聞くので、麗子夫人は、「……ええ、わかっているわ。その下手人は、あの気味のわるいめくら三助だわ。あいつ、たしかに、あたしを三番目の犠牲者にしようとならっているのよ」、「……ほら、第一は水木蘭子、第二は真珠夫人、そして、第三は大内麗子っていう順番なのよ」と言うと、下田夫人は、「……エ、では、あのめくら三助が世間を騒がせた殺人狂だつていうの？ まあ、あんたどうかしているんじゃない。目の不自由な男に、あんなすばしっこい芸当ができると思って」と、あつげにとられて、美しい麗子の顔を見つめるのであった。

### 二四、女怪対盲獣

「……まあ、あんなめくらが、どうしてそんなだいそれたことを」と、下田夫人は、信じられないという調子で言うと、「……世間の人みんな、あんたみたいにお人好しですからよ。まさかめくらがと思い込んでいるからよ。あの悪がしこいめくらは、そこへつけ

込んだのよ。これほどあぶなっかしくて、その実これほど安全な犯罪はないといっていいわ」と、麗子夫人は、得意らしく述べるのであった。そして、「……最後には警察の力を借りるしかありませんけれど、そのまえに、あたし、ちよとばかりあいつをなぶってやろうと思うのよ」と言うと、「……まあ、あなたが？ およしなさい。もしものことがあったらどうするのさ」となるが、麗子夫人は、「……命がけだからこそ、すばらしくおもしろいのよ。安全にきまつてる冒険なんて、しないほうがましだわ」と言うと、下田夫人は、あっけにとられて、「……で、あなたの計略は？」と聞くので、「……この人形よ。これをあたしの身代わりに立てるのよ」と言うと、下田夫人は、「……ホホホホ、あんなやつぱりお若いわね。いくらめくらだつて、人間の皮膚とゴム人形のけじめがつかないやつはありませんよ。あいつがそんな甘手に乗ると思つて？」と言うと、「……そうおっしゃるでしょう。ですから、計略があるのよ。あたし、あいつにどこへでも連れられていって、酒盛りを始めるつもりよ。お酒はごく強い西洋酒を用意し、うまく勧めて、あいつをふらふらに酔っぱらわせてしまおう。それからよ、人形の身代わりを出すのは。相手はひどく酔っぱらっているでしょう。冷たいゴム人形だつてわかるもんですか。人肌とは違うけれど、形はそっくり同じだし、弾力も人間の肉に似せてこしらえてあるし、そのうえ、その人形は強く切れば血が出るのよ。ゴムの芯に細い隙間が通じていて、全身に犬の血が封じこめてあるのよ。ただうぶ毛や手穴がないだけだわ。どう？ これならうまくいきそうですね。相手はまったく目のない酔っぱらいさんなのよ」と言うのであった。すると、下田夫人は、「……聞いてみると、ひよつとしたらうまくいきそうかもね。しかし、一つまちがえれば命がけよ」と言うと、「……ええ、でも、命がけが好きなんですもの」と言うので、下田夫人も、「……そのけしきが見たいわねえ。あんなたいよいよやるときまったら、あたしたちクラブ員にも見せてくださらない。そつとすき見のできる場所だといいただけれど」と言うので、麗子夫人は、「……それは心得ていますわ。わたしも見てもらいたいのよ。このすばらしい芸当をひとりで楽しむなんてもったいないわ。日と場所は、きまりしだい皆さんにお知らせするつもりよ。場所はもうちゃんといいたいところをみつけてあるのよ」と言うのであった。

## 二五、裸女虐殺

さて、その日の晩、麗子未亡人は、自宅の人払いの私室へ、盲獣のめくら三助を呼ぶのであった。そして、「……ねえ、あんまさん、あたし松崎さんみたいに銭湯へ行つてもんでもらう勇氣はないけれど、お湯で柔らかくなつたところを、そのままじかに療治してもらつたら、さぞいい心持ちでしょうね」と言うと、盲獣は、「……へへ……それはもう、こうしておもみしているのとは雲泥の相違でございますよ」と言うので、麗子夫人は、そこでと、ささやくような声で、「……うちのふろでは女中たちに誤解されるといけないので、巢鴨の端っほに寂しい一軒家があるのよ。わたしの持ち家で、今はちよとあき家になつているの。そこにはりつぱな湯殿があるので、あんだとふたりでそこへ行つて、その湯殿の中で、あんだに思う存分もらおうかしらと思つているのよ」と言うので、盲獣は、ほくほくとして、「……よろしゅうございますとも、そういう静かなところでしたら、わたくしもじゅうぶん腕がふるえると申すものでございます」と、快諾するのであ

った。そこで、日を定めて自動車でいっしょに行くことにして、あんまを帰し、翌日は、クラブの臨時会を開いて、すき見の打ち合わせをするのであった。

さて、麗子未亡人は、「……でね、あたしはあんまを連れてさきに行き、すっかり酔わせたうえ湯殿に連れ込み、まず最初に自分をほんとうにもませておいて、頃合いを見はからっては、用意の人形と入れ代わり、あたしは湯殿の外へ出て、外のくらやみからそつとのぞいていますから。そこへあんたたち、来ていただくのよ。だって、湯殿の中でほんとうにもませているところを見られちゃ、あたし恥ずかしいんですもの。わかって、あんたたちはね、庭の枝折り戸の外まで来て待つてくたさるのよ。はいってもいいという合図にはフクロウの鳴き声で、……ホウ、ホウ、ホウ……ね。この声が合図よ。そうしたら、あたしの左側に、ちょうど一尺（三十センチ）おきくらいに見る穴が三つあけてあるので、ちゃんと順番をきめておいて、そのとおりに並んで、みな黙って、すぐのぞくのよ。その時分には、むろん中のしばいが始まってますからね」と言うのと、三人の会員たちは、激しい期待でわくわくするのであった。

さて、いよいよ約束の当夜となり、三人の年長未亡人たちは、約束の時間に、教えられた巢鴨の寂しいあき屋敷の少し手前で車を捨てて、やみの中をひそひそと邸内に忍び込み、例の枝折り戸のところ、合図をおそしと待つていると、案外早くフクロウの鳴き声が、三鳴、ホウ、ホウ、ホウと聞こえてきて、近寄ると、麗子が中腰をして、羽目板に顔をくつつけて、一心不乱にのぞき込んでいたので、三未亡人たちも、あらかじめ申し合わせておいた順番で、黙ったまま、その穴へ目を当てると、浴槽は向こう側にあつて、その手前に白タイトルの流し場があり、そこにぐつたりと横たわっているのは、麗子の身代わりのゴム人形であろう。全裸体で、あおむけに長々と寝そべっている姿が、どう見てもほんものの麗子としか思われぬほど、実に巧みにできていて、そのゴム人形の上に、例の醜悪な盲人が馬乗りにまたがり、両手で人形の首をぐいぐいと押しつけている、裸女殺害のすさまじい光景であった。（もちろん、それは、「麗子人形」などではなかったのである。）

## 二六 イモムシごろごろ

それから半時間後、絞殺され、せめさいなまれ、侮辱のかぎりを受けた麗子人形は、いたましいまでぐつたりとなつて、一個の物体のごとく横たわっていた。盲獣は、「……麗子さん、さすが勝ち気な美人後家さんも、いくじがないね。へへ……お望みに従いまして、これより最後の療治に取りかかりますよ」と言いながら、かたわらに用意してあつた大きな出刃包丁を拾い上げると、身の毛もよだつ人肉料理をはじめ、みるみるうちに、首も、手も、足も、コロコロとちよん切られていった。ちよん切るごとに、切り口から黒い血のりがポンプのように飛び上がるのであつた。そして、「……へへ……血だ、血だ、なつかしい血のおいだ」と言いながら、切り離れた五体を一つ一つドブドブと浴槽のなかへと投げ込むが、その真つ赤な浴槽の中には、いま切り離れたゴム人形とは別に、麗子がこしらえたばらばらの五体が浮かべてあつたので、合わせてふたり分の首、手、足、胴体が、浴槽いっぱいになって、ゴロンゴロンと浮き沈むなか、「……へへ……ああ、たまらねえ、からだじゅうゾクゾクして、心臓をしばらくられるようだ」と、浴槽につかりながら言い、今度は、それらの手や足や首などを湯の中からつかみ上げては、めちやめちやに

流し場へたたきつけ始めた。そして、「……へへへ……イモムシごろごろ、イモムシごろごろ、へへへ」と、得体の知れぬ歌をうなりながら、かれは五体の山の上を、ゴロゴロゴロとほんとうに断末魔のイモムシのようにころがりまわったのである。

一方、のぞき穴の未亡人たちは、このあまりにも醜悪なる光景を正視するにしのびなかった。たとえゴム人形の切れっぱしにせよ、この刺激はちと強すぎて、さすがのモサたちも、へとへとになってしまった。まず、松崎夫人が隣りのひじを突いて帰ろうと合図し、それからまた隣りへ、ふたりの未亡人は、羽目板を離れて、その場を立ち去ろうとしたが、今夜の主催者の麗子だけは、石像のように羽目板にとりついたまま動こうともしない。山崎夫人は、「まあ」とあきれて、麗子の背中に手をかけて静かに揺り動かしているうちに、何かにひどく驚いたように、「……麗子さんのからだ氷のように冷たいのよ」と、驚きのあまり、声を出してはいけないという「禁制」を破って、蚊のような声でささやいた。残るふたりもびつくりして、麗子のそばに寄ってきては、下田夫人も耳のそばで「麗子さん」とささやきながら、彼女の肩をぐいと押すと、麗子のからだは棒を倒すように地上にころがっては、ポンポンと二度はずんではなないか。変だぞと、よく見てみると、麗子の顔は死人のようというよりは、ゴムのように灰色であった。未亡人たちは、きつねに化かされた感じで、一瞬間ばんやりと突っ立っているだけであつたのである。

それでは、一体、どうしてこういう「結末」になつてしまつたのか？ それは、まず、麗子夫人の「計略」というのは、「……巢鴨の寂しい一軒家に自動車であんまと一緒に行き、そこで相手に強い西洋酒などをうまく飲ませて、すっかり酔わせたうえで湯殿に連れ込み、まず最初は、ほんとうに自分の肉体をもませておいてから、頃合いを見はからつては、用意しておいた人形と入れ代わり、あたしは湯殿の外へ出て、外のくらやみからそつとのだく」というものであつたが、——実際は、相手をすっかり酔わせたうえで湯殿に連れ込み、まず最初は、ほんとうに自分の肉体をもませるまでは、まさに「計画」通りに行つたに違いなく、計画通りに行かなかつたのは、次の「……頃合いを見はからつては、用意しておいた人形と入れ代わる」ということが出来なかつたということである。

それは、一体、なぜか？ それは、結局、相手に「計略」を見破られてしまつたからなのか？ その場合、最初から見破つていた場合と、もう一つは、途中で初めてそれに気づく場合とがあるかと思うが、そのどちらであれ、それよりも遙かに大事なことは、盲獣自身は、巢鴨の寂しい一軒家の湯殿に二人で行くという話を聞いた時から、恐らく、そこで麗子夫人を「最初から殺害しよう」と計画を立てて乗り込んでいった」ということであり、その「絶対的証拠」となるものは、まさに「……かたわらに用意してあつた大きな出刃包丁を拾い上げると、身の毛もよだつ人肉料理を始めた」というところであり、最初から「大きな出刃包丁」を用意して出かけて行つたということが最も大事な急所になるのである。

一方、盲獣の最大の「失敗」は、三人の未亡人に直接「麗子殺害現場」を見られてしまつたことであり、それは、「……ほら、第一は水木蘭子、第二は真珠夫人、そして、第三は大内麗子っていう順番なのよ」と言つていた麗子夫人の言葉通りになつたということであり、あの「めくら三助」こそは、まさに世間を騒がせている連続「殺人犯」であることが、はっきりと知られてしまつたということであり。やがて、警察に通報されて、まさに「盲獣」（めくら三助）は、全国的に「指名手配」されることは、もはや時間の問題になつたということである。それゆえ、いわゆる「女怪」（大内麗子）対「盲獣」（めくら三

助)との対決は、いわば「痛み分け」という結果になったのである。

## 二七、鎌倉ハム大安売り

さて、ゴム人形事件の二、三日のちの真夜中、東京から百里も離れたI湾を、いつそうの汽船が走っていた。船尾の三等船室は、十五、六畳の赤茶けた畳敷きで、鉄の網に包まれた十個ほどの電灯が、魚市場のマグロのようにころがった船客たちを陰気に照らし出していた。その船室の最も薄暗い一隅に、まだ寝ずに話しつづけている四、五人の客があった。一人は、無精ひげの黒い田舎おやじ、一人は、潮風に赤黒く光った顔の海産物仲買人、一人は、錦紗縮緬に似合わぬ不行儀な奥さま、一人は、漁村の小学校の先生、といった人々の真ん中に、会話の中心となっているのは、黒めがねをかけ、合いトンビを着て、紳士然とおさまった盲獣であった。いくらなんでも、もう東京にはいられない。三人の未亡人が警察へ密告したのは知れたことである。そこで、盲目殺人鬼の都落ちとはなったのであるが、張り巡らされた警察の網の目を、どこをどうしてのがれたのか、かれはこの船室にぬけぬけと陣取っているのである。むろん、船客のだれひとり怪しむものはない。

「……ところで、皆さん、わたしは商人じゃないが、親戚の食料品屋が店じまいをして、実はただみたいいな値で手に入れたものがあるんですよ」と言い、それは、「……鎌倉ハムです。あぶらの多い塩かげん上等の、とてもうまい肉です。少しずつ目方は違いますが、まあ、一つ千円は下りません、卸し値ですよ。ところで、わたしはこんなにはたくさんはいらないので、一つあればじゅうぶんです。で、あとは皆さんにお分けしたいと思うが、ただでは失礼なので、どうです。トランクに入れてここまで来た運賃として三百円では、このでかいやつが一包み三百円ですぜ。中身はだいたいじようぶ、会社の倉から出たばかりの新鮮なものです。なんなら、少し小口を切ってごらんすつてもいい」と言うのであった。

すると、最初、海産物仲買人がそれらすべてを買い取ると申し出るが、盲獣は、「……おっと、待ってください。そうあんたひとりに持っていかれては、わたしの気持ちが悪くありません。こうしてご同船を願ったよしみに、皆さんに一つずつお分けしたいのですよ。一つずつ」と言うのであった。そこで、起きていた乗客はもちろん、寝ていた人たちも目をさまして、薄暗い電灯の下で、奇妙な取り引きが始まり、大安売りの鎌倉ハムは、羽が生えたように売れていった。やがて、船はとある南国の漁村にいきりをおろすと、盲獣は、「……では、皆さん、お先へ失礼しますよ」と、例の不気味なニヤニヤ笑いをしながら、その船を降りていくのであった。

一方、客と荷物をおろした船は、再び、いかりを上げて進行を始めるが、四十あまりの漁師体の男が、「……ああ、おらあ腹が減っちゃった。この肉は生でも食えるんだね。ひとつごちそうになるべえか」と、かれはハムの包みをベリベリと破り始めると、朱色の布がめくられて、中からべとべとした生肉が現われるのであった。が、なにか妙な顔をして、手を止めて、「……いや、こりやあ不思議だ。この豚はつめがはえているぞ。見なせえ」と言い、「……一本、二本、三本、四本、五本あるぞ、……」となり、突然、それをポイと遠くの方へと放り出すと、「……なんだ、どうしたんだ」と。小学校の先生は、放り出されたハムの包みを拾ってみると、「……ワア、これあ人間の手だ。しかも、女だせ。若い女の手だぜ。みんな、いま買ったハムの包みをやぶつてみたまえ、早く、早く」となり、

すると、足が出て来る。ももが出て来る、あばら骨が出て来る、中には、顔面を切断して、鼻と口と半分ずつ付いている肉片を発見したおかみさんは、あまりの恐ろしさに、アツと呼んだまま気を失ってしまったほどであった。そして、「……オーイ、船を止めてくれ。重大事件だ。この船に殺人犯人が乗っていたんだ。いま出発した港へ引り返すんだ。さつき降りためくらのとつかまなければならぬ。オーイ、船を止める」と、小学教師は甲板に駆けのぼりながら、走りまわって怒鳴るのであった。

## 二八、盲人天国

さて、船が港へ引り返した時には、盲人はどこへ消え去ったのか影もなかった。港の人たちもそんなめくらが上陸したことさえ知らなかった。盲獣はいよいよ大胆不敵となり、すでに「お尋ね者」となった身で、不自由なめくらの旅を続ける一方で、今はまた、未亡人麗子の肉をこまごまに切り碎いては、恐ろしき「鎌倉ハム」を製造し、それを公衆に売りつけては、一体、どうするつもりなのか？ こんなだいそれた所行をして、われとわが犯罪をみせびらかしながら、いつまでも逃げおおせると思っているのだろうか？

だが、かれはむろん、いつまでもその港町をうろろしていたわけではない。夜通し山越しをして、翌朝は、非常に寂しい漁村に辿り着いていた。翌日は、よく晴れたうらかな日和で、海は紺色に美しく光っていて、見渡す限り人影もない海岸の、とある大岩の影に、四人の海女たちがたき火をしてからだを暖めていた。四人とも若くて、はち切れそうな愛くるしいからだをしている。それが男のような赤いふんどしをしめて、そのほかには一糸もまとわず、相撲取りが四股を踏む格好で、たき火にあたっているのであった。

その中の、いちばん年若の一人が、「……お留さ、さあひと仕事しべえよ」と言うのと、「……おまえ先にもぐるがいいよ。働きもんだのう。いろ男の亭主持つと、働きがいもあるべえ」と、年かさのひとりが言うのであった。やがて、若い海女は、海でパチャンと水煙を立てて、それから水中を底へ底へと沈んでいって、岩にすいついているアワビをはがしとっては、海上へと浮かび上がり、「大漁だ」と、片手を上げて、大きなアワビを二つみせびらかしては、やがて、彼女は海岸にはい上がってたき火のそばへ走ってきた。すると、「……アワビですかい、それとも真珠ですかい」と、岩陰からロイドめがねを光らせ、合いトンビを着た一人の盲人が出てきた。若い海女は、「……アワビだよ。真珠なんてめつたにとれるもんじゃねえだよ」と言うのと、「……そうですかい、だが、アワビにしても、たいしたもんだらうね。……」と言いながら、だんだんとたき火のそばへ近づいてきた。そして、盲人は、自分は目は見えないが、「……心眼で、おまえたちのうちで、だれがいちばん美人だか当ててみようか」と言うので、海女たちは、「……ハハハハハ、美人だつてよ。こんなところに美人なんていねえだよ。ハハハハハ」と笑うのであった。

すると、盲人は、「……美人はどこにだっているよ。さあ、おまえたちは四人だね、だれがいちばん美しいだろうな」と言いながら、隣りに立っている一人の肩に手を触れ、背中からおしりのほうへとなでまわすのであった。ふつうであれば、すぐに逃げ出すところであるが、海女たちははだの感触には鈍感になっていて、また、相手が盲人であるという気安さから、別におこりもしなかったのである。そして、盲人は、「……ふむ、これはどうも実に素晴らしいもんだね、都のきやしゃな女のはだは、おまえたちのからだに比べた

ら、まるでうすぎたなくてお話になりやしないよ。このはちきれそうな精気というものが、実に美しいのだよ。おまえたたちが美人でなくて、ほかにどこに美人がいるのか」と言うので、四人の海女たちは、すっかりその気になってしまい、その奇怪なる盲人は、次から次へと四人の海女の裸身のあらゆる部分を手の感触で十分に堪能し天国を味わい尽くしたあと、今度は、懐中からザクザクと重いさいふを取り出して、それを両手にもって遊びながら、いよいよ商談にとりかかったのである。

それは、「……わしはね、おまえたたちの取ったアワビをすっかり買ってあげるよ。値はいくら高くてもかまわない。おまえたたちのいいなりしだいだ。だがね、それには一つ条件があり、おまえたたちの亭主や村の人たちに、このことをしゃべらないという約束をしてもらいたい。つまり、わしは、おまえたたち一人ひとりとこっそりと取り引きがしたいのだ」と言うのと、海女たちは、顔を見合わせて笑っていたが、この村は貧乏であったし、海女たちには貞操観念も乏しかったので、ただお金に目がくれて、黙々のうちにそれを承諾してしまつたのである。そして、その夕方、盲人は村から遠く離れた無人の境の大きな岩陰に、人待ち顔にたたずんでいた。約束をたがえず真つ先にやって来たのは、いちばん年上の二十歳そこそこの海女であった。ちゃんと着物を着て、手にはアワビを入れた網袋をさげて、「……まだ、だあれもこないけ」と言うのと、「……来ない。ちようどいいのだ。わしはね、おまえひとりに用事があるんだよ」と言いながら、結局は、かわいそうな第一の海女は、今までの「三人同様」に殺人鬼「盲獣」の餌食となり果ててしまうのであった。

## 二九 盲人の彫刻

さて、この物語の主人公である「盲獣」は、レビュー団の女王「水木蘭子」を初めとして、カフェの中年マダム「真珠夫人」を、また、未亡人クラブの若き会員「大内麗子」を、さらには、たくましい「漁村の海女」をもて遊び、殺し、手と足をバラバラに切りきざんでは、その「死骸」を世にも「奇怪なる方法」で公衆の面前にさらしものにしてみせた、不気味にもいまわしき顛末を書き続けてきた。——むろん、かれの悪行は、以上に尽きたわけではなく、本来であれば、第二、第三の海女を、かれがいかにむごたしくもて遊び、殺したか、そして、そのバラバラの死体はどのように捨てられたか、さらに、漁村をあとにした盲獣が、その後、どのような女を、どのようにもて遊び、かつ処分したかを書きしるすべきであるが、それらはもはや蛇足である。少なくとも、わが醜悪なる主人公「盲獣」の人となり、その病癖、その所行は、以上の記述によつて、わかり過ぎるほど分かつてしまつたに違いない。——そこで、たった一つ残されていることは、かれ「盲獣」の少々風変わりな「最期」についてである。それは、盲獣がかの漁村を訪れてから一年余りも経つた秋のことである。N美術展覧会の有力な審査員で、奇癖をもつて聞こえていた彫刻家「首藤春秋」氏は、全くの未知の人物から、左記のような手紙を受け取るのであった。それは、次のようなものであった。

\*

\*

わたしは今秋の展覧会に、わたしの生涯をささげた作品を出品したいと切願するものがございます。それはいかなる国、いかなる時代にもかつて前例をみない、うるわしくも不思議な美術品でございます。わたしは、わたし自身のためにも、美術界のためにも、ど



うしてもこれを先生のご好意をもって世に出していただきたいのです。

先生、私は盲人なのです。盲人が四十余年の生涯をささげ作り上げた触覚の芸術です。それには七人の女性の生き血がこもっており、七人の女性の命がささげられています。

かく申し上げても、先生の好奇心は動かないでしょうか。いや、必ず先生は私の願いをお聞き入れくださることを信じて疑いません。そのためには、私の不思議なアトリエを先生のほうからご訪問くださるほかには、いかなる方法もないのです。わたしはある事情によって、その秘密のアトリエを一步も外に出られない身の上からです。おきみがわるいでしょうか。先生はこの異様な申し出に二の足をお踏みなさるのででしょうか。いやいや、先生は必ず来てくださいます。必ず来てくださいます。

——アトリエへの道程——

麹町区Y町……付近で「お化け屋敷」とお尋ねになればすぐに分かります。必ず先生お一人で訪問し、玄関を上がって正面の廊下を真っ直ぐに突き当たると、壁に大きな鏡がはめてあり、その大きな鏡の右の柱の上の鴨居の裏へ手を伸ばして、小さなボタンを強く押せば、鏡が開いて、その奥に秘密の通路が現われ、そこを二、三間進みますと、箱のようなものにぶつかりますが、それが私の地下のアトリエへの昇降機（エレベーター）であり、その昇降機の操縦法をお心得でございましたら、数秒の後、先生はちゃんとアトリエの内部にご到着されるでしょう。

#### 盲目の一彫刻者より

さて、首藤氏は、一日一晚その手紙のことばかり考えていた。何か犯罪めいた匂いさえ感じられたが、さすがは「美の神」に仕える首藤氏であった。それらの不気味さよりは、さもさも自信ありげに記されたその作品に対する好奇心のほうが大きかった。これは、ひよつとしたら、すばらしい掘り出しものかもしれないぞという予感が、この美術家を夢中にさせたのである。翌日、単身で指定の場所へ出向くと、そのあき邸宅はすぐにわかった。なるほど「お化け屋敷」に相違なく、玄関も、廊下も、クモの巣だらけで、歩くとはこりが舞い上がり、行き当たりの大鏡もよごれくすんで、大きなひび割れさえあった。首藤氏は用意の懐中電灯を照らして、鴨居の裏の押しボタンを探して、それを押すと、大鏡は開き、その何かの巣箱のようなほら穴を見た時には、さすがの首藤氏もよほど引き返そうかと思ったが、「……ええ、かまうものか、踏み込んでやれ」と蛮勇をふるって進んでは、エレベーターにぶつかり、地下のアトリエへと降りていくのであった。

さて、その地下の秘密のアトリエがどのようなものであるかは、すでに読者はよく熟知の通りであり、そこには、あらゆる大きさの、あらゆる姿態の、あらゆる色彩の、女性のあらゆる「部分部分」（パーツ）で満ちあふれた空間であったが、奥へと進むと、ふと円光の中に異様な物の姿が映った。それは一つの「裸女の塑像」らしいものであり、長方形の木製の台の上に、不思議な形で横たわっていた。どこの展覧会でもかつて見たことのない気違いめいた一つのかたまりであったが、首藤氏は、その気違いめいた一つのかたまりの中に含まれている「異様な美」にうちのめされたのだ。そして、美術家の鋭敏な両手の指でむさぼるように塑像の表面をなでさすり始めると、「……すてきた。すてきた、この感触はどうだ、この感触はどうだ、実にすばらしい」と、呟くのであった。

### 三十、悪魔の遺産

さて、首藤氏に手紙を出した盲人は、その地底のアトリエにはもちろん、邸内のどこを捜しても、姿を見せなかった。この驚くべき天才を捜し出そうとほねをおったが、展覧会の締め切りまで、かれはついに姿を現わさなかった。しかし、作者がこの作品を出展したがっていたことは確かであり、首藤氏は他の審査員たちの反対を押しきって、作者不詳としてこの彫塑を選させることに成功した。そして、N展覧会が開かれると、作者不明の彫塑は世間を騒がせた。それは、「どうしてこんなバカバカしいものを選させたのか」という非難の声であり、見物人たちは、しろうとも、くろうとも、その彫塑の前に立つて、あつけにとられた。その裸美人は、一体にして三つの顔、四本の手、三本の足を備えて、しかも、その顔、その手足は、あるものは大きく、あるものは小さく、あるものは肥えて、あるものはやせ、全くふぞろいで、ちぐはぐであり、調和とか均整とかいうものが美の要素だとすれば、この作品は美とは正反対のものであるとしか考えられなかった。

それは、乱れた髪の下に一つの首があった。その首の三方に三つの顔がついていた。つまり、この女人は、六つの目と三つの鼻、口を備えているのだ。その奇妙な首を、一本の腕がつきひぎをしてささえていた。第二の腕は、後頭部を押さえ、ひじを空さまに立て、第三、第四の腕は、胸の前に何かを抱擁している形に左右から交わっていた。その胸——異様に広い胸には、四つの大小ふぞろいな乳ぶさがふくれ上がっていた。おしりのふくらはみは三つにわかれ、その間には二つの谷間ができていた。そして、足が三本、あるものはまがり、あるものは伸び、あるものは立てひぎの不行儀な形でよじれ合っていた。この彫刻の醜さは、それらの多過ぎる手足のためというよりは、むしろ人体各部のつり合いがまるでめちやくちやで、一見して人間という感じが少しもない点にあった。人々はそれを見て、あつけにとられ、次の瞬間には、プツと吹き出さないではいられなかった。

それでは、首藤氏はなぜそんなこっけいな化け物を選させたのであるか、一体、この彫刻のどこにそれほどの取りえがあったのか。その秘密は、まもなく分かるときが来た。それは、開会后二、三日すると、N展覧会には盲人の入場者が大勢つめかけてきた。この彫刻の作者が盲人であるからだけではなく、ただこの不思議な彫刻のまわりに集まって、いつまでもいつまでも、その女人像をなでさすって楽しんでいたのであった。ちょうど、首藤氏が最初それを発見した時に、まずその表面をなでさすったと同じように。

一方では、ある大新聞の文芸欄に、審査員「首藤春秋」氏の奇妙な論文が掲載されて、百万の読者を仰天させた。その論文は「触覚芸術論」と題するもので、作者不詳の怪彫刻を紹介推薦した連載の長文であったが、その意味は大体左記のようなものであった。

### 三一、触覚芸術論

この世には、目で見る芸術、耳で聞く芸術、理知で判断する芸術などのほかに、手で触れる芸術が存在してしかるべきである。われわれが日常手に触れるもの、例えば、書物のページだとか、ペン軸だとか、ステッキの握りだとか、ドアの取っ手だとか、毛皮のえり巻きだとかは、目で見た形状、色彩などのほかに、触覚的な美しさが重大な要素となり、制作者はそれを念頭において制作しているに違いない。これは非常に卓近な「触覚美」の

一例に過ぎないが、この種の美を一つの芸術として扱あつかうことはできないであろうか？

われわれの従事している彫刻芸術は、面の凹凸おうとつを取り扱うものであるから、最も「触覚美」に縁が深いはずであるが、古来、触覚のみの美を目的として制作した作者はいない。かれらが狙うところは、ただ目で見た形であって、手で触れた形ではなかった。大理石を材料とする場合にも、かれらが触覚を第一に考えたわけでは決してなかった。実に奇妙なことだが、われわれは視覚ばかりを考え、触覚を少しも意に介しなかった。それはなぜか。それはほかでもない、われわれには目があるからだ。われわれは盲人ではないからだ。もし人間が犬のように嗅覚が敏感であったら、この世にはもつともつと「においの芸術」が発達していただろう。それとまったく同じように、われわれに目がなかったならば、この世にはもつともつと「触覚の芸術」が発達していたに違いない。

しかし、われわれは盲人ほどではないが、相当敏感な触覚を付与されて生まれている。その「触覚」を、現在のごとく黙殺してよいのだろうか。われわれは閨房けいぼうの遊技のほかに、この鋭敏なる触覚の用い場所はないのであろうか。

触覚のみの芸術！ これこそ、われわれ彫刻家に残された一つの重大なる分野ではないのか。目で見た形と、手で触れた形とは、相似あひにたるがごとくにして、実ははなはだしく相違しているものである。従って、触覚的彫刻は、今あるがごとき彫刻とは全然違ったものでなければならぬ。——わたしは日頃から、半ば夢想的にそのような考えを抱いていたが、ある日、無名の盲人の生涯をかけたという作品に接して、わたしの夢想が決して単なる夢想でなかったことを確かめ、おどろき上がるばかりの歓喜を味わったのである。

それは、目で見た形は、まったく無意味な一つのかたまりに過ぎないが、ひとたび目を閉じて、その表面をなでさすってみるならば、今まで目にしてきた形とは全然異なった一つの新しい世界を発見して、がくぜんとして驚かざるを得ないものである。そこには純然たる「触覚美」が存在するのである。視覚あるがゆえに、妨げられて気づき得なかった「別の世界」があるのである。それは、盲人でなければ創造し得ない作品であった。また、盲人でなければ真に鑑賞しえない作品でもあったのである。

いま展覧中のその盲人の作品の前には、毎日たくさん盲人たちが群がりよって、美しき触覚を楽しんでいる。これがわたしの触覚芸術論を裏書きする何よりの証拠ではないか。盲人たちはわれわれが見て傑作なりとしている彫像には、指先を触れようともしないのだ。そして、われわれにこっけいに見えるかの作品に群がり寄っていくのだ。わたしはあの盲人の傑作に接して、生まれてはじめて目のあることを残念に思った。あの作品を十分に味わうほど、触覚が純粹ではないからである。しかし、世の目ある人々よ、諸君は諸君の不幸をそんなに悲しむことはない。盲人ほどではなくても、あの彫刻の美しさは、ある程度まで理解することができるのだ。それがどのような美しさであるか。とうてい文字で表現するすべはない。触覚の「秘密世界」をのぞきたい人は、N展覧会の彫刻室を訪れて、問題の彫刻の前に立ち、瞑目めいもくして静かにそのはだをなでさすってみるがよい。

\*

\*

この不思議な「論文」が発表されてから、展覧会の入場者にはわかに激増した。そして、今は盲人だけではなく、目のある人々も先を争って、その彫刻のはだに触れようとした。その美しさのわかる人もあった。わからない人もあった。しかし、誰もかも一応はそれに指を触れないでは承知しなかった。毎日、それらの群衆にもまれて、ひとりの醜い中年の

盲人が、その彫刻の前に立ちつくしていた。かれは別に彫刻に指を触れようとするのではなく、ただあちこちと人並みを分けながら、群衆の話し声に聞き入っていた。そして、何かニタニタとひとり悦に入っていた。触覚美術のうわさは日一日と高まっていった。

そして、終に展覧会最終の日が来た。その日も好奇に燃える群衆は、早朝から彫刻室へつめかけてきた。そして、かれらはそこに、目ざす彫刻の上に不思議な一物を発見して、ギョツと立ちすくむのであった。

その裸女の彫刻の上に、ひとりの醜い盲人が、おつかぶさるようにとりすがって、死に絶えていた。かれの口からは毛糸のような血のりが一筋タラタラと流れて、彫像の白いはだを美しくいろどっていた。——この盲人こそ、世を騒がせた触覚美術の作者であるとともに、われわれの誰もがよく知るまさに「盲獣」その人であった。盲獣はあらゆる女性の肉体をあさり、その美を味わい尽くした。そして、ついに殺人淫楽にも飽き果てたのであるか、それとも、彼の罪業の数々はすべて手段に過ぎなくて、盲目の世界の芸術をこの世に残すことが、かれの最終の目的であったのか。作者はそのいずれであるかを知らぬけれども、ともかく、罪業の半ばをつぐなうに値するほどのすばらしい贈り物を残して、それに対する輝かしい賞賛の声を耳にして、何の思い残すところもなく、盲獣はかれの作品を愛撫しながら、楽しい「毒薬自殺」を遂げたのであった。

だが、次の一事は、恐らく、何人も気づかなかった。あの彫刻の一つの顔と、一本の腕と、一つの乳ぶさは水木蘭子を、一つの顔と、一本の足は真珠夫人を、二つの乳ぶさと、一つのおしりと、腹部とは大内麗子を、ある部分は漁村の海女を、またある部分は、読者の知らぬ美しき被害者を、それぞれにモデルとして、その触感がそっくりそのまま再現されていたこと。それゆえに、あの彫像の手足が、あるいは太く、或いは細く、異様に不均整であったのだし、また、盲獣の手紙の中に、七人の女性の命がこもっているなどと、異様な文句が記されていたのだということを、何人も、当の首藤氏さえも、少しも気づかなかった。そして、恐らくは、あの彫像がいつまで保存されようとも。いかにしてもはやされようとも、永久の秘密となって残ることであろう……。 (本文完結)

\*

\*

さて、この「触覚芸術論」は、なかなか「優れた内容」であり、多くの人たちの賛同を得るかと思うが、例えば、われわれ人間の場合、四つ足から「直立二足歩行」へと進化することによって、一体、何がどう変わったのかと敢えて問えば、それは、まず、立つことによって、「目」(視覚)と「耳」(聴覚)との「発達」を促すことになった。が、一方では、「嗅覚」や「触覚」などは、むしろ「後退」してしまっただのである。そして、われわれ人間の場合、七割から八割近くは、まさに「目」(視覚)に依存しているのであり、それゆえ、どうしても「見た目のよいもの」を何よりも優先敵に選ぶことになるのである。——一方、「目」が不自由になれば、今度は、何よりも「耳」(聴覚)が発達して来ると同時に、まさに「嗅覚」や「触覚」なども敏感になって来るものである。特に手ざわりの「感触」というものは、まさに「物」を直接確認する上では、最も大事な「感覚」になるものであり、それゆえ、手ざわりやはだざわりなどは、目の見える人たちに比べれば、遙かに「敏感になっている」ことは、全く疑いようのないものである。

つまり、われわれ人間の場合、一般的には、どうしても「見た目のよいもの」を何よりも優先的に選びやすいが、その次は、「音」(音彩)のよいものを選びやすく、その次あた



命」のためには「……人殺し、破壊活動、強奪、強姦、その他」、何でも許されるのだと思ひ込んでみたり、また、芸術や芸のためなら、その他、何のためであれ、人を踏みつけ犠牲にしてもよいのだという実に愚かしい「考え方」に取り憑かれやすいものだが、それらはすべて間違つた「考え方」であり、その人の芸術や芸その他などがどれほど優れているとしても、人間としてはただの「クズ」になつてしまふのである。——つまり、芸術家として優れていることと、人間として優れていることとは、全く全然違うことであり、それぞれの分野での「特化」は、いわば「その道の器用」に過ぎず、例えば、政治や経済が得意、学問が得意、文学が得意、絵が得意、音楽が得意、芸能が得意、スポーツが得意、医療が得意、その他、その人がたとえ何が得意であつたとしても、それだけを以て、人を踏みつけ犠牲にしてもよいのだという「論理」というのは、実に愚かしい「考え方」であり、なぜなら、例えば、何々のためと言ひながら、実はその人の「欲望や感情」などを満たしているだけの、自分が可愛いだけの、その人の勝手な「エゴ」に過ぎないからである。もちろん、その人の「才能」を高く評価するのはよいが、だからと言って、何をやっても許されるなどという「特権」などは何一つ許されてはいいないのであり、何らかの「犯罪」を犯せば、当然のことながら、その「罪」は償わなければならないということである。

### 三二、結び

さて、この作品の主人公「盲獣」という人は、ある明治の大富豪の一人息子であり、その父親の死後、恐ろしいほどの財産を手に入れ、そこで、一つの「念願」を起こすことになるが、それは、まず、盲目の悲しさは、きれいな女性を直接見ることができない。また、美しい景色も直接見ることはできない。その他、すべて同じことである。おれは、その境遇を憎み、そして、神様を恨んだ。だが、どうなるものでもない。盲人の世界に残されているのは、音と、匂いと、味と、触覚ばかりだ。音（音楽）は、おれには吹き過ぎる風のように物足りない。また、匂いは、人間の鼻（嗅覚）は、犬のように鋭敏ではない。そして、食べ物、ただ腹がふくれるばかりだ。そう考えると、触覚こそ、おれたち盲人に残された唯一無二の享樂であることがわかつた。おれは、このたつた一つの享樂にとりすがつたのである。いろいろな物の中でも、生き物の手ざわりがおれには一番楽しかつた。最初は、犬や猫をはじめ、いろいろな動物たちの手ざわりを楽しんでいたが、どんな生き物も、人間の、それも女性に及ぶものはないことが、はっきりとわかつて来たのである。

おれには女房がいた。顔はきれいだつたが、肉体はやせっぽちだつた。女とはこんなものかと数年一緒に暮らしたが、あるとき、別の女からだを知つた。それが闇つきになつて、おれはたくさん女の手ざわりを楽しむようになった。女からだの美しさには、いつまでたつても、際限がなかつた。おれは世界じゅうの女のはだに、ひとりひとり触れてみないではがまんができないほどになつた。そのうち、財産も少なくなり、最後に思ひついたのでこの部屋であり、五年と残りの財産のほとんどを費やし、あまり有名ではない彫刻家に、過去の女からだの中で、すぐれた部分を選び出して、彫刻家に詳しく話しては、その通りに作らせたのである。その苦心はどれほどであつたらう。そして、半年間は、ここに入りびたつて、昼も夜も、一つ一つの彫刻をなでまわして、有頂天になつていた。しかし、相手は死物だ。やがて、生きた人間（女性）が恋しくなつて来たのである。

その頃、まさに「水木蘭子の噂」を聞いたのである。そして、あの美術館会場で彼女の大理石の裸像に触れ、また、あんまに化けて、彼女の身体に直接触れて、評判は間違ではなく、今まで会ったどの女性よりも、彼女は美しかった。おれは一刻も早く彼女を手に入れたくなり、彼女が舞台で倒れたとき、舞台裏にこっそり忍び込み、そして、小村という男からの電話を盗み聞いて、あの自動車の計画を思いついたのである。そして、ままと、こうして「水木蘭子」を手に入れることができたという展開になるのである。

その後、この物語の主人公である「盲獣」は、そのレビュー団の女王「水木蘭子」を初めとして、カフェの中年マダム「真珠夫人」を、また、未亡人クラブの若き会員「大内麗子」を、そして、たくましい「漁村の海女」をもて遊び、殺し、手と足をバラバラにきりきざんで、その死骸を世にも奇怪なる方法で、公衆の面前にさらしものにしてみせた、不気味にもいまわしき悪行を続けるのであった。むろん、かれの悪行は、以上に尽きたわけではなく、第二、第三の海女を、かれがいかにむごたらしくも遊び、殺したか、そして、そのバラバラの死体はどのように捨てられたか、さらに、漁村をあとにした盲獣が、その後、どのような女性を、どのようにもて遊び、かつ処分したかを書きしるべきであるが、それらはもはや蛇足である。少なくとも、わが醜悪なる主人公「盲獣」の人となり、その病癖、その所行は、以上の記述によって、わかり過ぎるほど分かってしまったに違いないとあり、その事細かな「内容」等は、本文を読んでもらえればそれで十分である。

\*

\*

さて、最後に残された「最大の問題」としては、レビュー団の女王「水木蘭子」を初めとして、カフェの中年マダム「真珠夫人」、また、未亡人クラブの若き会員「大内麗子」、そして、たくましい「漁村の海女」、その他の実に数多くの女性たちが、なぜどうして醜悪なる「盲獣」の手に堕ちてしまったのかという問題であり、それは、次のようなことになるかと思う。――まず、レビュー団の女王「水木蘭子」の場合であるが、彼女は、醜悪なる「盲獣」のその「計略」にまんまとはまって、彼の不気味な「地下室」へと連れ込まれてしまったわけである。それゆえ、レビュー団の女王「水木蘭子」という女性は、当然のことながら、最初のうちは、できる限りの「激しい抵抗」をし続けたのである。

ところが、やがて、「……さすが強情がまんの水木蘭子も、身も心もしびれるようなこの大刺激には、ヘトヘトになって、ついに凶暴なる猛獣の威力に屈服してしまった。屈服したばかりではなく、彼女はおぞましくも、このたぐいもあらぬ地底の別世界に、限りなき愛着を覚え始めて、いまわしい盲獣さえも、今は何かしら不思議な魅力をもって彼女の感覚をくすぐるようになり、蘭子については怪盲人の妻たることを承諾し、日とたち月と過ぐるうちに、地底の愛人の情交はますますこまかになっていった」とある。それは、一体、なぜなのか？ それは、たとえ頭の「知性や理性」などでは嫌っていたとしても、その身体への強い「刺激や快感」などを無理やりでも一度受け入れて心を許してしまうと、相手は誰であるかよりも、その「身も心もしびれるような強烈な刺激」が忘れ難くなり、それゆえ、その「身も心もしびれるような強烈な刺激」を渴望して、次第に自ら積極的にその世界を受け入れるようになってしまう傾向があるのである。それが、まさに「マゾサド世界」（つまり「被虐・加虐」世界）の非日常的な強烈な「刺激世界」や「感覚世界」が成り立つ理由の一つになるのである。そして、蘭子は、かれと離れてはもはや一日も生きていけないほどになってしまったのである。

そして、「……おまえさん、あたしを見捨てないでくださいね。ほんとうに、いつまでも、いつまでも見捨てないでね」と、蘭子ともあるうものが、そんなことを言うほどにかわっていた。そして、蘭子は視覚を失っていった。目の病いを患ったのではない。彼女はほとんどそれを使用しなかった。それほど盲人の「触覚の世界」が彼女には気に入ったのである。——例えば、「性的世界」に深く溶け込んでいる時には、多くの女性たちの「視覚」の働きというのは自然と弱まり、かわって、その身体へのより強い「刺激や快感」などを執拗なまでに追い求めてやまぬという全身「触覚の世界」へと変化して、いって、「もつと、もつとよ」という心理になつているのである。つまり、「……視覚を忘れてこそ、初めて、ほんとうの触覚の『味』がわかるのだ。神秘で、幽玄で、微妙きわまる手ざわりや肌ざわりその他の心地よさがしみじみと味わたるのだ」と。そして、「……ああ、わたしは今こそ、触覚ばかりで生きている目のない下等動物どもの、異様な、甘い、なつかしい感覚がわかるような気がする。かれらはけつして不幸ではないのだ」となるのである。

次に、カフェの中年マダム「真珠夫人」や、また、未亡人クラブの若き会員「大内麗子」の場合であるが、真珠夫人も「大内麗子」も、その「醜い盲人」（めくら三助）に異様な好奇心を持ち始める。というのも、めくら三助の技術（裸体あんま術）には特殊の魅力が潜んでいて、ぬめぬめとすべる石けんのおぼくの上を、十本の指がまるで「大グモ」のように快い拍子を取って這いまわり、その指の下では客の「肉体」は、まるで「水まくら」のようにダブダブと波打つのであった。そして、客たちは、まるで催眠術にでもかかったように、目を細めて、かれらの裸体をめくらの三助のもて遊ぶがままに任せて、不思議な「陶酔境」にうつとりと酔い痴れていくのであった。それは、身体への強い「刺激や快感」などを執拗に受け続けながら、まるで全身「触覚だけの世界」へと変身して、その不思議な「陶酔境」にどこまでも深く溶け入っては、その「虜」になつてしまつたのである。

その後、カフェの中年マダム「真珠夫人」の場合は、今夜一時「三越」の裏で待つというあんま三助の「肉文字」によつて誘い出されて、やはり例の不気味な「地下室」へと連れ込まれては、そこでありとあらゆる「情痴の遊技」をし尽したあとは、かつての「水木蘭子」と全く同じように、最後はバラバラに殺害されてしまうのである。——一方、未亡人クラブの若き会員「大内麗子」の場合は、めくらの三助を「連続殺人犯」と見破りながら、警察には届け出ず、その前に、麗子そっくりの「ゴム人形」で盲人をからかつてやろうと、巢鴨の端っばに寂しい（持ち家の）一軒家があり、今はちようどあき家で、そこにはりっぱな湯殿があるので、そこへ盲人と一緒に車で行つて、その湯殿の中で思う存分もんでもらおうと「策略」を企てるが、逆に、それは、まさに「盲獣」の思うつぼになつてしまい、結局は、前の二人と同様に、バラバラに殺害されてしまう。その後の、漁村の海女の場合も、結局は、同じ運命を辿るのである。それでは、なぜ、この「盲獣」は、次から次へと女性を殺害し、手足をバラバラにし、その手足をわざわざ公衆の面前にさらすようなことをするのだろうか？ それは、作者ではないので何とも分かりかねるが、敢えて言えば、この「盲獣」という人物は、まさに真性の「サディスト」（加虐愛好者）であつたということになるのかも知れない。……

\*

\*



「参考文献」

※ 底本 「江戸川乱歩文庫十字路他一編」(「春陽堂」)